

# 若江遺跡第29次発掘調査報告

1989・3

財団法人 東大阪市文化財協会

## はしがき

若江遺跡が発見されて以来、すでに42回におよぶ発掘調査が実施されてまいりました。その成果は若江遺跡の様相を明らかにしています。古くは弥生時代に始まり、戦国時代、安土・桃山時代を通じて営まれた複合遺跡であることが判明し、若江寺跡、若江郡衙、若江城や各時代の集落など、数多くの遺構、遺物が発見されています。

今回の調査は主として鎌倉時代の建物跡、溝、井戸などを検出し、若江城築造以前の若江遺跡の状態を確認しました。また、水田跡や人間の足跡などを多数検出し、多大な成果をあげることができました。しかしながら、この成果も若江遺跡の一端を垣間見たに過ぎません。今後の発掘調査によって、さらに貴重な成果が得られることを期待しております。

最後に、調査および報告書の作成にあたってご協力、ご指導いただいた方々に深くお礼申しあげるとともに、本書が広く活用されることを心から願うものであります。

平成元年3月

財団法人 東大阪市文化財協会

理事長 木寺 宏

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾土木事務所が進めている府道大阪東大阪線（旧称四条・長堂線）拡幅工事に伴なって発掘調査を実施した若江遺跡の調査報告書である。
2. 現地調査および遺物整理は、財団法人東大阪市文化財協会が大阪府八尾土木事務所の委託を受け、現地調査を昭和59年11月14日から昭和60年1月25日まで、遺物整理を昭和63年9月1日から平成元年3月31日まで実施した。
3. 調査・整理は次の事務局体制により進めた。

理 事 長 木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）

事務局長 寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）

庶務部長 吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）昭和61年4月まで

下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任） 昭和61年12月より

調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）

庶務部 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）

調査部 上野節子

調査担当 上野利明（東大阪市教育委員会文化財課）

調査補助 有山淳司 平井多美子（旧姓岡村） 本田けい子 辻元秀 森田浩成 平井二美子 田中富佐子 石井正明 吉川越子 長谷川喜子 広瀬美佐江  
岩尾好淑 大西純子 稲垣滋美 高須明美 新谷久美子 小森千佳 梁村加奈子 金弘美 藤井元子 成川珠美 大和久仁子 今井喬子

4. 本書の執筆はI～IVを上野、Vを吉村博恵（東大阪市教育委員会文化財課）が行なった。
5. 図版に収めた遺構写真は、上野、有山が撮影し、遺物写真は谷川喜一氏（スタジオ、G.F.プロ）に委託した。
6. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
7. 調査の実施にあたっては、大阪府八尾土木事務所に多大な協力をいただいた。記してお礼申しあげる次第である。

## 本文目次

I . 調査に至る経過.....	1
II . 位置と環境.....	2
III . 調査の概要	
1 . 調査の方法.....	4
2 . 基本層序.....	6
3 . A・B地区の調査.....	8
4 . C地区の調査.....	8
5 . D地区の調査.....	8
6 . E地区の調査.....	10
7 . 出土遺物.....	13
IV . まとめ.....	23
V . 過去における若江道路の調査.....	24

## 図 版 目 次

- 図版1 第29次調査遺構 1. D地区足跡  
2. C地区足跡
- 図版2 第29次調査遺構 1. B地区第1遺構面(畦畔)  
2. D地区第1遺構面(畦畔)
- 図版3 第29次調査遺構 1. E地区第1遺構面(畦畔)  
2. B地区第2遺構面
- 図版4 第29次調査遺構 1. C地区第3・3'遺構面(溝11)  
2. D地区第3・3'遺構面東半部
- 図版5 第29次調査遺構 1. D地区第3・3'遺構面(土塁2)  
2. D地区第3・3'遺構面(溝12・13)
- 図版6 第29次調査遺構 1. D地区近世遺構面  
2. D地区第2遺構面
- 図版7 第29次調査遺構 1. E地区第2遺構面  
2. E地区第3遺構面
- 図版8 第29次調査遺構 1. E地区第3遺構面(井戸1)  
2. E地区第3遺構面(井戸1)
- 図版9 第29次調査遺構 1. E地区土器溜り  
2. E地区土器溜り
- 図版10 第29次調査遺構 1. E地区井戸2  
2. E地区井戸2
- 図版11 第29次調査遺構 1. E地区井戸2  
2. E地区井戸2
- 図版12 第29次調査遺構 1. D地区柱穴93  
2. D地区柱穴88
- 図版13 第29次調査遺構 1. D地区柱穴89  
2. E地区柱穴74
- 図版14 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版15 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版16 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版17 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版18 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版19 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版20 第29次調査遺物 土器溜り出土土器

- 図版21 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版22 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版23 第29次調査遺物 土器溜り出土土器
- 図版24 第29次調査遺物 E地区井戸2内出土遺物
- 図版25 第20次調査遺構 1. 20-2地区堀(西より)  
2. 20-2地区堀(東より)
- 図版26 第20次調査遺構 1. 20-2地区堀内逆茂木出土状況  
2. 20-2地区堀内逆茂木断面
- 図版27 第20次調査遺物 木簡
- 図版28 第24次調査遺構 1. 24-3地区第1・2遺構(南より)  
2. 24-3地区土塙3
- 図版29 第24次調査遺構 1. 24-2地区堀(南より)  
2. 24-2地区堀(部分)
- 図版30 第24次調査遺構 1. 24-2地区堀内遺物出土状況(1)  
2. 24-2地区堀内遺物出土状況(2)
- 図版31 第24次調査遺構 1. 24-2地区堀内遺物出土状況(3)  
2. 24-1地区第1遺構(北より)
- 図版32 第24次調査遺構 1. 24-1地区第2遺構(北より)  
2. 24-1地区第3遺構(東より)

## 挿 図 目 次

第1図 土地条件図 (1/75000).....	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000).....	3
第3図 調査地点位置図 (1/800).....	4
第4図 若江遺跡地区割図 (1/1000) .....	5
第5図 基本層序模式図.....	7
第6図 土塙2断面.....	9
第7図 土塙3断面.....	10
第8図 井戸1実測図.....	11
第9図 井戸2実測図.....	11
第10図 瓦器椀実測図.....	14
第11図 瓦器椀実測図.....	15

第12図 瓦器柵実測図	16
第13図 瓦器皿実測図	17
第14図 瓦器皿実測図	18
第15図 土師器小皿実測図	19
第16図 土師器中皿・大皿実測図	20
第17図 揃鉢・甕実測図	20
第18図 羽釜実測図	21
第19図 井戸2内出土遺物実測図	22
第20図 20-1地区東壁断面図	28
第21図 20-1地区平面実測図	29
第22図 20-2地区逆茂木見通し断面図	30
第23図 20-2地区実測図	31
第24図 24-1地区実測図	33
第25図 24-2地区実測図	35
第26図 24-3地区第1遺構礎石実測図	36
第27図 24-4地区実測図	37

付図1 若江遺跡調査地点全体図

付図2 第29次調査遺構全体図

付図3 24-2地区瓦・壁下地検出状況実測図

## 表 目 次

第1表 柱穴計測値	12
第2表 瓦器皿分類表	13
第3表 土師器皿分類表	18

## I. 調査に至る経過

若江遺跡は、東大阪市若江北町3丁目付近を中心として、東西500m、南北800mと推定される範囲を有し、弥生時代から江戸時代におよぶ複合遺跡である。若江遺跡の発見は、古くは昭和9年に遡り、楠根川（現在の第二寝屋川）流路改修工事に際し、土器が出土したことに始まる。その後、府道中央環状線敷設工事、東大阪市立若江公民分館建設工事など数多くの工事に伴って土器片が出土し、この付近が遺跡内であることが周知されるようになった。

当遺跡の本格的な発掘調査は、昭和47年になって実施された。市立若江小学校建設に伴う調査（第1次）である。第1次調査では、室町時代を中心とした土壙状遺構や、井戸、溝、柱穴などが確認されている。また、昭和49年の第5次調査では、初めて若江城の建物の礎石列が発見された<sup>1</sup>。そして、昭和55年の第17次調査において若江城の堀跡が検出された<sup>2</sup>。その後の調査では、堀内に瓦、壁下地などが廃棄された状態で出土し、文献では記されていない若江城の廃絶時期を確定するうえで貴重な資料を得ることができた。

このような状況のなかで、府道大阪東大阪線（旧称四条・長堂線）拡幅工事に伴う発掘調査が昭和49年より継続して実施されてきたが、今回昭和59年度事業として、若江南町3丁目地内

において拡幅工事および電話線埋設工事の計画が提示された。

そのため、東大阪市教育委員会文化財課では、計画地点が若江遺跡の西端にあたり、また、周辺の調査結果から、遺構が残存している可能性が考えられ、事前の発掘調査が必要であるとの見解をまとめに至った。そして、原因者と協議の結果、工事計画の範囲約260m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することを決定し、市教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施することとなつた。

発掘調査は昭和59年11月14日～昭和60年1月25日まで、遺物整理は昭和63年9月1日より平成元年3月31日まで実施した。



拡幅後の府道大阪東大阪線

## II. 位置と環境

若江遺跡は東大阪市のほぼ中央部、東大阪市若江北町、南町、本町付近に広がっている。当遺跡が所在する東大阪市は、東を生駒山地、西を大阪湾に囲まれた大阪平野の中央部に位置しており、市域の大半が地盤の悪い湿地帯として知られている。これは、気候の温暖化による海水面の上昇によって市域が湾（河内湾）となったことに原因する。その後、河内湾は古大和川や淀川の堆積作用により潟、湖、池へと変化したことが知られている。若江遺跡周辺では、この変化について遺跡の分布の変遷を観察することができる。

河内湾の時期の遺跡は、この周辺には認められない。弥生時代前期（河内潟）になり山賀遺跡が現われる。山賀遺跡では、前期の土器とともに繩文晩期長原式の土器が出土している。中期では、北方に瓜生堂遺跡が始まる。後期になると、巨摩麻寺、若江北遺跡などがある。若江遺跡内においても、後期の土器や水田の畦畔が確認されている。古墳時代以降では、西岩田、意岐部遺跡など、前期から後期を通じて遺跡が存在する。また、梶山彦太郎氏は、新家遺跡や山賀遺跡で発見されたクロベンケイと考えられるカニの巣穴から、新家遺跡内で検出された柱穴群を漁業基地と考え、満潮時の汀線がこの付近であったことを推定している。

このように、若江遺跡周辺では、北方に古墳時代以前の遺跡が認められることなどから、弥生時代前期、河内潟から汀線が北へ移動するにつれて徐々に新たな集落が築かれ、後期、河

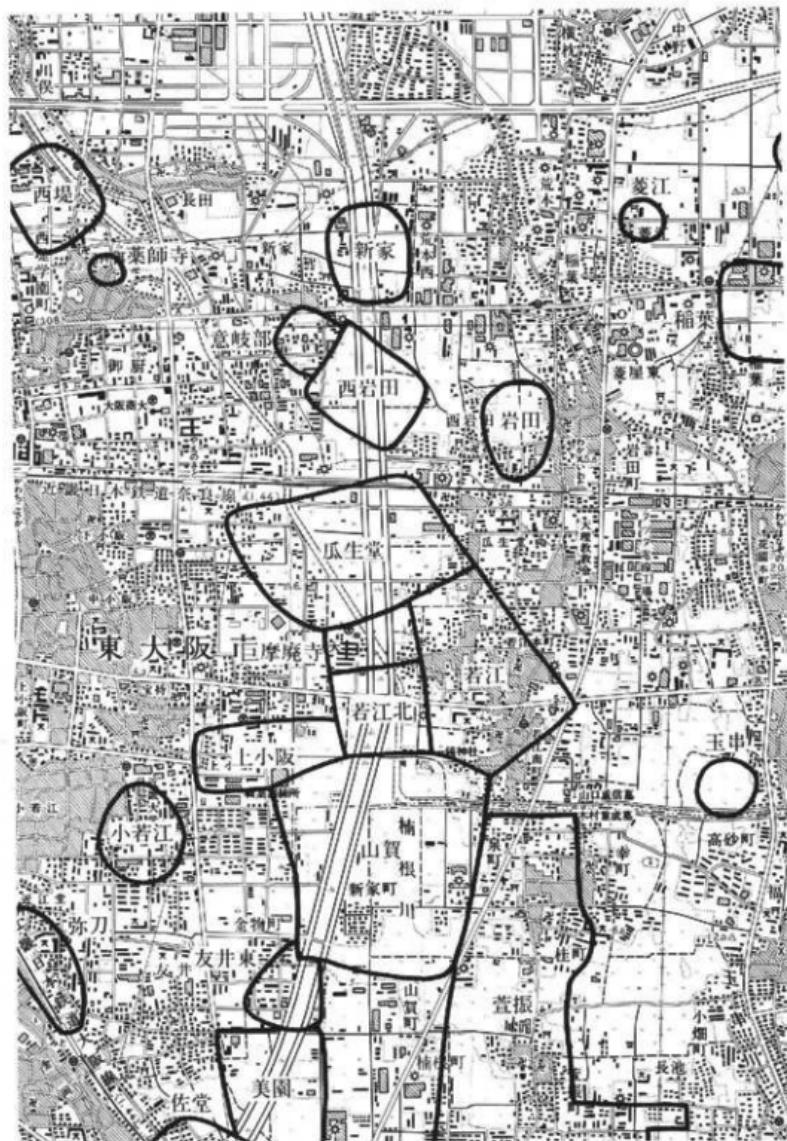
内潟の時期になり、安定した状態になって遺跡が増加したものと考えられる。

さらに、これらの遺跡の立地を詳細に観察すると、大和川の旧河道である長瀬川と玉串川の中間に位置している。この付近には自然堤防と考えられる土壙が南北方向に広がり、2本の旧河道とは異なった位置にあることが観察される。これは、旧大和川が一時期若江遺跡周辺を北流していたことを推定させる。これらの遺跡群は、この自然堤防上に築かれたものであろう。

その後、歴史時代以降は流路が変化し、自然堤防が微高地状の地形となり、微高地を利用して若江遺跡—若江寺、郡衙、城などが築かれた。周辺の低地は湿地帯としての水田耕作あるいは自然の防御設備として自然環境に合せた土地利用が行なわれたのである。



第1図 土地条件図(1/75000 國土地理院より)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

### III. 調査の概要

#### 1. 調査の方法

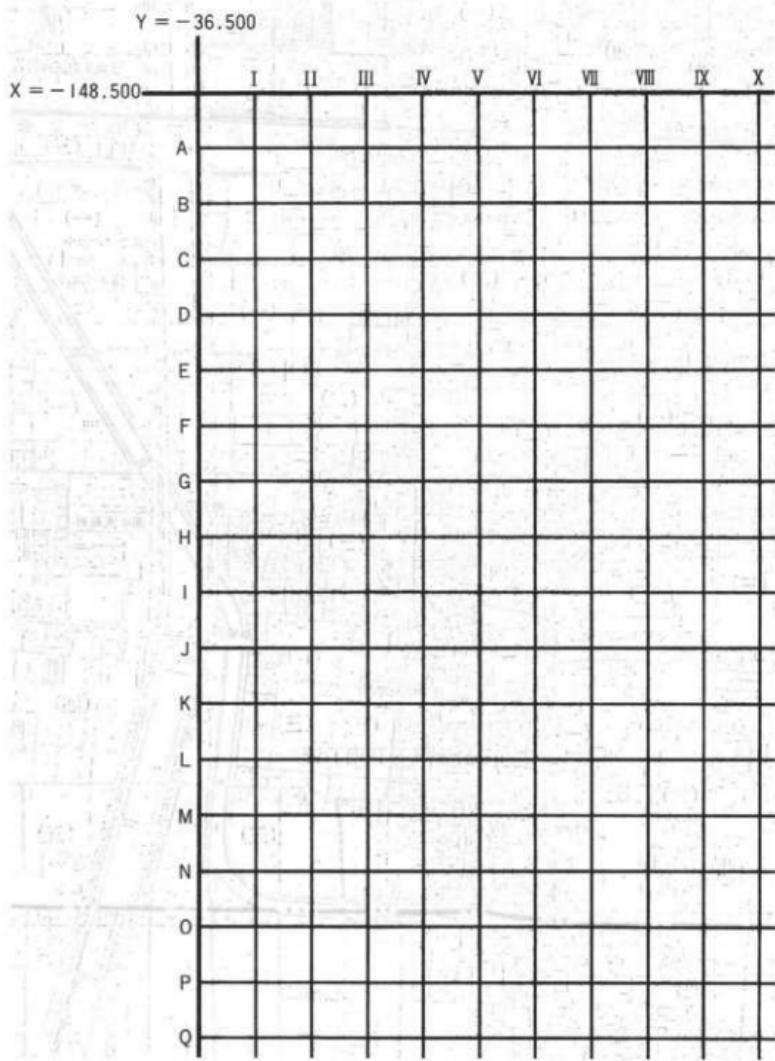
調査は、國土座標に準據した若江遺跡の地区割に従って実施した。この地区割は、東大阪市西岩田2丁目に原点 ( $X = -148,500$ ,  $Y = -36,500$ ) を置き、東西方向 (Y軸) の境界線を100m単位に I、II、III……(若江遺跡の範囲ではIXまで)、南北方向 (X軸) を100m単位に A、B、C……(同上ではNまで)として、大区画を設定した。さらに、大区画を5m単位に細分して小区画とした。小区画の境界線の名称は、東西方向を1~20、南北方向をa~tとした。各地区の名称は、南東隅の交点の境界線名称を組み合わせて表わす。したがって、北西端の小区画の名称は、IA1aとなる。

実際の調査にあたっては、調査範囲の制約から、各トレンチに仮名称を付け、西よりA~E地区とし、報文中では、この仮名称と地区名、および、國土座標値を併記した。尚、若江遺跡の地区割は、昭和54年に設定し<sup>6</sup>、使用していたが、國土座標に準據していないため、不備な点が多く、昭和59年より今回の地区割を新たに使用している。

調査の方法は、上層の盛土を機械により掘削、以下を入力により各層毎に精査した。また、交通量の多い道路に接しての調査であるため、住居等への進入路の確保、掘削の深さの制限等から、一部立ち会い調査に切り替えた地点がある。



第3図 調査地点位置図 (1/800)

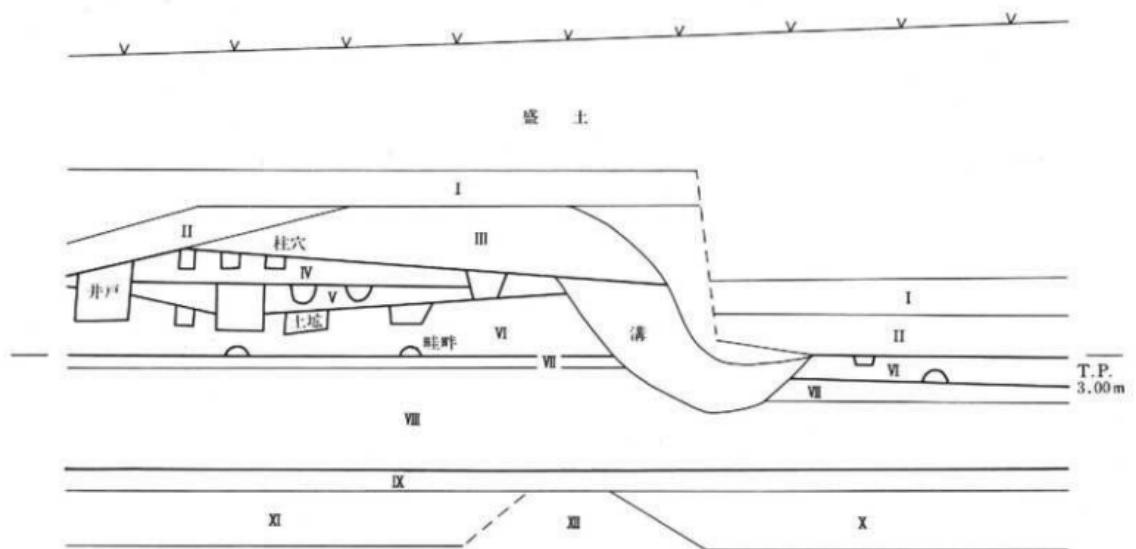


第4图 石门造跨地图(1/10000)

## 2. 基本層序

調査地点の基本層序は以下のとおりである。現在の地表面の高さは東端でT.P.4m、西端でT.P.4.5mを測る。

- 第Ⅰ層 オリーブ黒色(5Y 3/2)砂質シルト。細～中粒砂多し。粗粒砂から細礫少量あり。
- 第Ⅱ層 灰色(7.5Y 4/1.5)砂質シルト。細～中粒砂多し。粗粒砂少量。暗オリーブ色(5Y 4/3.6)シルトのブロック多量に混じる。
- 第Ⅲ層 黒褐色(2.5Y 3.8/1.5)砂質シルト。中～粗粒砂少量あり。2～3mm大の細礫少量あり。酸化鉄多し。炭化物少量。  
上面に近世のスキ跡、溝等の遺構あり。
- 第Ⅳ層 黄褐色(2.5Y 3.8/1.6)砂質シルト。1～2mm大の細礫多し。酸化鉄、炭化物少量。  
上部は暗オリーブ色(5Y 4/3.6)シルトのブロック多し。  
上面で13世紀代の井戸、溝、柱穴が認められる。(第3' 遺構面)
- 第Ⅴ層 黄褐色(2.5Y 4.3/1.2)砂質シルト。中～粗粒砂多し。細礫少量。酸化鉄多し。  
上面で13世紀代の井戸、溝、柱穴が認められる。(第3 遺構面)
- 第Ⅵ層 オリーブ褐色(2.5Y 4.4/3.5)シルト。上部は砂混じりのシルト。酸化鉄、中～粗粒砂多し。西側(B・C地区)では約40cm低くなる。  
上面で13世紀代の溝、柱穴がわずかに認められる。
- 第Ⅶ層 黒褐色(2.5Y 3.8/1)粘土質シルト。中～粗粒砂多し。酸化鉄少量。第Ⅵ層と同様に西側で低くなる。  
上面で水田畦畔検出。
- 第Ⅷ層 明褐色(2.5Y 6.6)砂。上部は粗粒砂～細礫多量。下部はオリーブ黒色(5Y 3.8/1.3)粘土質シルトの薄いラミナあり。西側ではシルトとなる。
- 第Ⅸ層 黒色(5Y 2.6/1)シルト質粘土。中～粗粒砂多し。炭化物、植物遺体少量。  
上面で足跡検出。
- 第Ⅹ層 黄褐色(10YR 5.6/5)砂、暗緑灰色(5G 4.8/1)シルトの互層。中粒砂～細礫多し。  
植物遺体多量に含む。
- 第Ⅺ層 暗緑灰色(10GY 4.4/1)シルト、暗オリーブ灰色(5GY 4.2/1)シルト質粘土の互層。  
細～中粒砂少量。
- 第Ⅻ層 にぶい黄色(2.5Y 7/4)砂。細礫多し。
- 現地表面の西側への高まりは、第2寝屋川の堤防の盛土である。そのため、盛土の厚さは西側トレンチに向かって厚くなる。東端で約0.4m、西側では、1.6mを測る。
- 第Ⅵ・Ⅷ層がB・C地区で低くなっているのは上部の盛土による圧密によるものであろう。  
第Ⅸ層以下がほぼ水平に堆積しているが、これは第II章で述べたように、この地点が旧大和川の自然堤防上に位置し、下部の土質の大半が砂層であるため、上部の堆積層の重量による影響が及ばなかったと考えられる。



第5図 基本層序模式図

### 3. A・B地区の調査

#### 1). A地区

A地区は今回の調査範囲の西端にあたり、第2寝屋川の右岸の堤防部分である。そのため、盛土が厚く、工事による掘削深度が造構面に達していないことから、工事中の立ち合い調査を実施した。

#### 2). B地区

##### 水田畦畔（第1造構面）

第VII層上面で検出。畦畔1は幅26～36cm、高さ5cm前後を測る。低い半円形の断面を呈する。ほぼ南北方向に走る畦畔と、直角に西へのびる畦畔がある。畦畔2は、幅26cm、高さ5～10cm、半円形の断面を呈し、畦畔1と平行せず、東へ約24度ふっている。畦畔1と2の間隔は、2.7～3.2mを測る。造構面の上部には暗オリーブ灰色(5GY 4.8/1)シルトが水平に堆積する。C地区を除き、各地区で検出。

##### 溝1～5（第2造構面）

第VI層上面で検出。溝1・2・4・5は、ほぼ平行に西へ約6度の角度をもってのびる。溝底部はほぼ水平である。溝1は幅約40cm、深さ約6cm、溝2は幅36～50cm、深さ5～10cm、溝3は幅38cm、深さ約5cm、溝5は幅32～42cm、深さ約5cmを測る。溝内の堆積土は暗オリーブ灰色(5GY 4.6/1)シルト質粘土である。

### 4. C地区の調査

#### 足跡

第IX層上面で検出。足跡内には灰色シルトが堆積している。検出面は第IX層であるが、実際の踏み込みは第X層のシルト層の堆積中からと考えられる。

#### 溝11

第IV層上面で検出。東端を溝12によって切られている。幅3.3m、深さ0.56mを測る。溝底部は平坦ではほぼ水平である。方向はやや西に向く。溝内の埋土は砂混じりシルトが2層に堆積し、ゆるやかに水の動く堆積環境と考えられる。

#### 溝12

D地区との境、第IV層上面で検出。溝11を切り、西肩を確認。上層はこの地区では削平を受けていると考えられる。溝11との時期差は遺物から認められない。ともに第3造構面である。D地区的項で詳細は説明。

### 5. D地区の調査

#### 1). 第1造構面

畦畔が第VII層上面で検出。トレンチ西側は溝12などがあるため確認できない。畦畔3は幅26cm、高さ5～10cmを測り、断面三角形を呈する。方向は東へ約30度ふる。畦畔4は幅約20cm、

高さ約5cmを測り、畦畔3と同方向から直角に南東方向へのびる。断面は三角形を呈する。南北方向の畦畔の間隔は4.3mを測る。

下層の第IX層上面で足跡を検出。西から東に向かって1人分の足跡が続く。C地区同様、上部の砂層の中より踏み込まれたと考えられる。

## 2). 第2造構面

溝6~9

トレンチ東部、第VI層上面で検出。ほぼ南北方向に平行してのびる。溝6は幅120cm、深さ約15cm。溝7は幅80cm、深さ約23cm。溝8は幅48cm、深さ17cm。溝9は幅46~66cm、深さ約15cmを測る。溝内の埋土は第5層である。

溝10

溝13と直行して検出。前後関係は不明である。幅20~34cm、深さ6cmを測る。

## 3). 第3・3'造構面

溝12

D地区からC地区にかけて検出。幅6.3m、深さ約1mを測り、断面は浅い皿状を呈する。ほぼ南北方向を向いている。溝内の埋土は砂混じりシルトで、静かに水が流れる堆積環境であったと考えられるが、掘り直しが行なわれた痕跡が認められ、中央部で2段に落ちる溝に変わる。後の埋土は植物遺体の混じる砂混じりの粘土で、濁んだ状態と考えられる。

上層には溝12の影響を受けて、近世に同規模の浅い溝が造られている。

溝13

溝12に平行して幅約2.2m、深さ約0.6mの溝がある。この溝も同様に掘り替えが行なわれたと考えられる。掘り替え後の幅は約1.2mとなる。

溝14

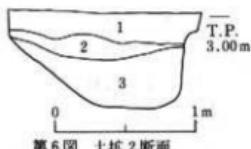
東西端を溝16と溝13に切られ、東西方向にのびる溝である。幅48~80cm、深さ約20cmを測る。

溝16・17

溝16は幅約40cm、深さ約5cmの浅い溝である。わずかに北西方向に湾曲する。溝内の埋土は第3層（砂質シルト）である。溝17はほぼ南北にのび、幅62cm、深さ28cmを測る。

土塙2

第IV層上面で検出。橢円形を呈し、短径140cm、長径190cm、深さ72cmを測る。埋土は第1層、褐灰色(10YR 4/1.8)砂混じりシルト。第2層は褐灰色(10YR 4/1.8)砂混じりシルト。第3層、オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土質シルトとなり、各層中に同色に近い粘土ブロックが混じる。人為的に埋められたものと考えられる。底部は第VII層の砂層に達しており、曲物等の施設は無いものの、井戸の可能性も考えられる。

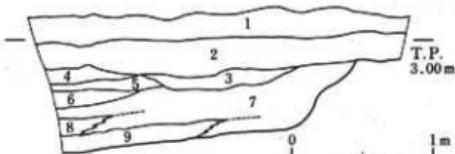


第6図 土塙2断面

### 土塙 3

トレーナー東端、第IV層上面で検出。深さ約80cmを測り、北東方向に向かって下がる。土塙底部は円弧を呈している。土塙内は砂、砂混じりシルトが堆積する。底部は第IV層の砂層に達し、また、第7～9層の堆積状況から、土塙3は底部付近で水の流れがあったと考えられる。E地区では確認できず、性格は不明である。

- 1. 喧灰黄色(2.5Y 4/1.5)砂質シルト
- 2. 喧灰黄色(2.5Y 3.8/1.6)砂質シルト
- 3. 黒褐色(2.5Y 3/1.2)砂混じり
- シルト 4. 褐色(10YR 4.2/3.5)砂  
混じりシルト～細粒砂 5. 灰色(7.5  
Y 4/1.3)砂混じりシルト～細粒砂
- 6. 灰オリーブ色(5Y 4/1.5)砂混じり
- シルト 7. オリーブ褐色(2.5Y 4/3.2)砂(砂混じりシルトのラミナあり) 8. 喧オリーブ灰色(5GY 3.6  
/1)砂混じりシルト(シルトのブロック多量) 9. 喧オリーブ褐色(5GY 3.8/1)シルト質粘土(炭化物、植物  
遺体少量)



第7図 土塙3断面

### 建物跡

第IV層上面で検出。方形の柱穴群である。検出状態から明確な建物の復元は困難であるが、溝14・16の方向と合致することから、溝に伴う施設の可能性が考えられる。

## 6. E地区の調査

### 1). 第1造構面

#### 畦畔

第VII層上面で検出。畦畔5は幅約40cm、高さ約3cmを測り、断面台形を呈す。隅丸の方形の一部を検出した。畦畔6は幅約42cm、高さ約6cmを測り、東へ約10度ふれた方向にのびている。B・D地区で検出した畦畔を含めてすべて同方向である。第1造構面を調査範囲全体で観察すると、B地区が後世の影響から若干低くなっているが、ほぼ水平である。

#### 土塙1

直径約100cm、深さ29cmを測る円形の土塙である。性格は不明。

### 2). 第2造構面

第VI層上面で柱穴群を検出。トレーナー全体に散在する。建物の復元は不可能である。

### 3). 第3造構面

#### 溝18

幅約32cm、深さ約2～5cmを測る。南北方向から北東方向へ曲がり、井戸2付近で消滅する。井戸2は第3'造構面で検出しているが、後述するように第3・3'両造構面の時期差は殆ど無く、同一時期の可能性もある。そのため、溝底部は井戸2に向けてわずかに傾斜していることから、井戸に伴う溝の可能性も考えられる。

### 溝19-21

トレント内をほぼ等間隔に南北方向にはしる。溝18は幅約36cm、深さ約8cm、溝20は幅約24cm、深さ約3cm、溝21は幅約32cm、深さ約10cmを測る。

### 井戸1

推定長径1.8m、短径1.4m、深さ1.2mを測り、橢円形を呈する。井戸の施設は曲物1段のみが残存する。後世の擾乱のため埋土、出土遺物については不明である。

#### 4). 第3'造構面

### 溝22-26

上部を削平されているため、溝は底部の残穴のみを検出した。溝22-25は南北方向にのび、幅24-32cm、深さ2-10cmを測る。溝26は幅80cm、深さ10cmを測り、東西方向である。

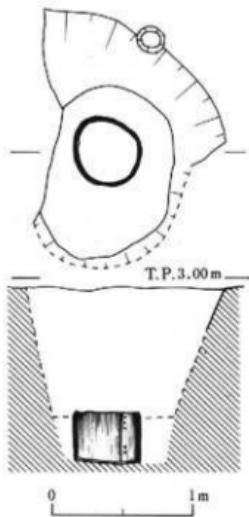
### 井戸2

井筒に曲物を4段使用し、上部に常滑焼の大甕を置く。甕の胴部下半は打ち欠いてある。井戸の掘り方は長方形を呈し、長辺176cm、短辺120cm以上である。井戸の構築は井筒部を第8層の砂層まで掘り下げる、曲物4段を置く。曲物の上端まで埋めた後、大甕を設置し、埋めている。

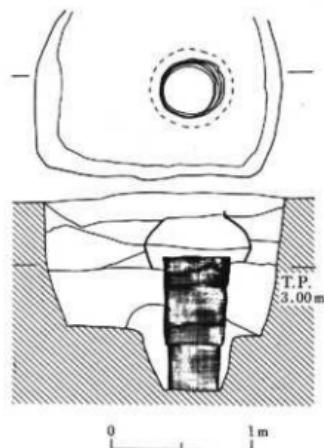
#### 5). 第3'・3'造構面柱穴群

トレント全域にわたって柱穴群を検出した。検出面は、第3造構面と第3'造構面の両面にわたっているが、第3'造構面での柱穴群は東側に、もう一面は中央から西側一帯で検出している。この第3造構面とした上部には、第3'造構面のベースとなっている第IV層が柱穴群の上部付近にのみ認められ、下部には多量の瓦器梶・瓦器皿・土師器皿などが大量廃棄された土層（土器溜り）がある。このことから、第IV層は整地層であり、第3造構面での柱穴群（建物）建替えのための整地と考えられる。

したがって、これらの柱穴群は検出面の違いを考慮すれば、方形の柱穴群を有するのが建替え時の建物であり、他は初期の建物に伴う柱穴群と考えられる。各1棟以上の建物があったと推定できるが、明確な建物のプランの復元は困難である。



第8図 井戸1実測図



第9図 井戸2実測図

地区	番号	形状	径・辺(cm)	深さ(cm)
E	1	方形	18×16	12.3
E	2	方形	18×16	8.0
E	3	円形	12	6.7
E	4	方形	20×15	7.6
E	5	方形	14×16	5.1
E	6	方形	18×16	9.7
E	7	方形	18×16	10.0
E	8	方形	18×20	9.6
E	9	方形	18×16	9.8
E	10	円形	25	6.7
E	11	楕円形	22×28	14.4
E	12	方形	34×28	14.3
E	13	楕円形	36×34	22.3
E	14	方形	20×14	13.0
E	15	楕円形	26×22	12.1
E	16	方形	16×18	29.6
E	17	方形	14	6.3
E	18	方形	18×16	14.2
E	19	方形	20	9.1
E	20	円形	10	4.6
E	21	方形	20×14	26.5
E	22	楕円形	14×18	9.5
E	23	楕円形	20×22	16.9
E	24	方形	10	3.2
E	25	円形	30	31.6
E	26	円形	26	89.6
E	27	楕円形	20×30	22.6
E	28	方形	16	9.2
E	29	円形	22	99.9
E	30	円形	10	11.7
E	31	方形	12×14	7.5
E	32	円形	13	10.5
E	33	円形	21	5.9
E	34	方形	14×18	16.0
E	35	楕円形	20×28	11.3
E	36	方形	16×14	7.6
E	37	方形	15×16	12.0
E	38	円形	12	
E	39	方形	14×12	0.3
E	40	円形	7	
E	41	楕円形	20×32	12.6
E	42	円形	26	12.1
E	43	方形	14	6.2
E	44	方形	14×16	13.7
E	45	円形	13	7.4
E	46	楕円形	11×14	6.8
E	47	楕円形	31×24	19.3
E	48	円形	8	4.1
E	49	方形	15×11	7.7
D	50	方形	18×32	37.1
E	51	円形	18	2.7
E	52	方形	16×20	3.9
E	53	円形	32	3.6
E	54	円形	18	4.7
E	55	楕円形	60×44	15.4
E	56	円形	17	8.1
E	57	円形	8	6.5
E	58	円形	14	
E	59	方形	36×34	23.8
E	60	方形	10	3.9
E	61	方形	10×11	27.3
E	62	円形	26	8.0
E	63	楕円形	35×26	19.7
E	64	楕円形	30×25	22.4
E	65	楕円形	25×32	7.6
E	66	円形	17	5.9
E	67	楕円形	22×20	9.8
E	68	円形	26	38.9
E	69	方形	21×10	6.4
E	70	方形	17	2.2
E	71	楕円形	26×8	2.9
E	72	楕円形	16×18	3.5
E	73	楕円形	12×20	6.6
E	74	楕円形	40×26	14.7
E	75	楕円形	29×22	16.7
E	76	円形	26	9.8
E	77	円形	15	3.1
E	78	円形	36	9.4
E	79	方形	26×22	14.1
E	80	方形	26×15	52.0
E	81	楕円形	22×17	3.7
E	82	方形	22×14	4.8
E	83	円形	16	10.0
E	84	円形	10	42.0
E	85	楕円形	45×30	35.6
E	86	楕円形	38×16	11.7
D	87	円形	28	14.3
D	88	方形	16×18	21.0
D	89	方形	18	15.7
D	90	方形	20	16.4
D	91	楕円形	28×20	7.6
D	92	方形	16×18	14.2
D	93	円形	18	5.1
D	94	方形	10×20	15.2
D	95	方形	12×14	5.7
D	96	方形	16	15.1
D	97	楕円形	46×40	11.2

第1表 柱穴群計測値

## 7. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器、木製品、自然遺物などがある。このうち、E地区第IV層内で検出した土器窪の土器群は、一時期に大量に廃棄されたと考えられる遺物群である。建物の建替えによる整地であり、短時間の堆積層と推定できるため、この項では土器窪出土の土器群を中心に報告する。

土器窪出土遺物には瓦器窪、瓦器皿、土師器皿、擂鉢、羽釜などがある。

### 1). 瓦器

#### 瓦器窪 (第10~12図)

瓦器窪の出土量は、土器窪内でかなりの比率を占めているが、型式の数は少なく、6型式に分類される。若江遺跡の瓦器窪については既に詳細な型式分類がされている。ここではその分類を踏襲したい。

出土した瓦器窪の大半を占めているのは、i型式である。体部外面に指頭圧痕、口縁部に強いヨコナデを施し、明瞭な稜線がつく。内面は荒いヘラミガキ、見込みに平行する暗文を施す。高台は退化して低く、断面は逆台形を呈するものが多い。口径は15cm前後であるが、器高は3.4~5.0cmと変化が大きい。見込みの暗文がジグザク状のもの(6)、外面に僅かなヘラミガキを施すもの(10)がある。

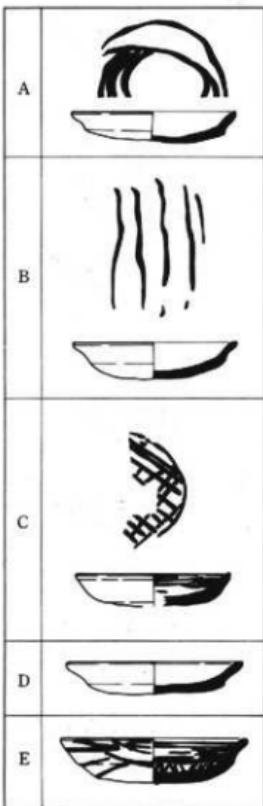
g型式が2点出土している。外面にヘラミガキを施すもの(3)、無いもの(2)がある。内面の見込み暗文は細かい格子状である。口縁部のヨコナデは強い。高台は退化して低く、断面三角形を呈する。

40はj型式にある。荒いラセン状のヘラミガキを施す。

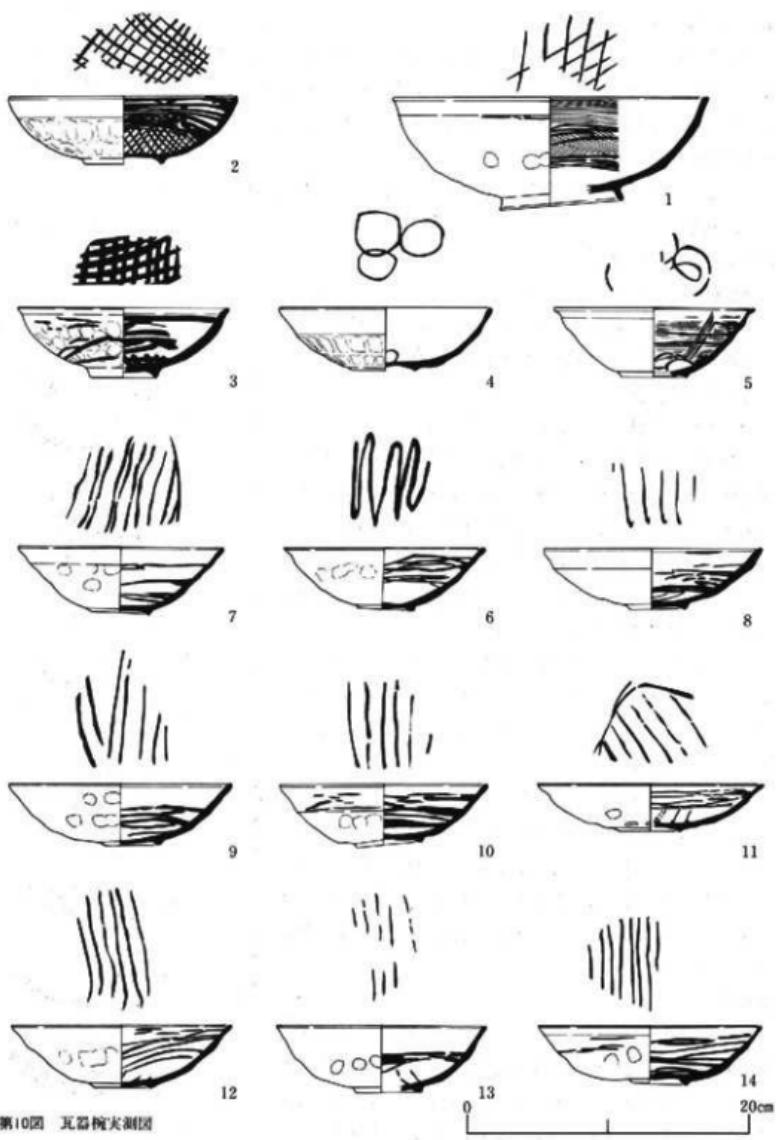
他に連結輪状の暗文を施すもの(5)、大型のもの(1)がある。1は口径22.4cm、器高8cmを測り、内面にハケ後荒いヘラミガキ、格子状の暗文を施す。外面にわずかにヘラミガキがある。高台は高く、しっかりとした造りである。口縁部に強いヨコナデを施す。

#### 瓦器皿

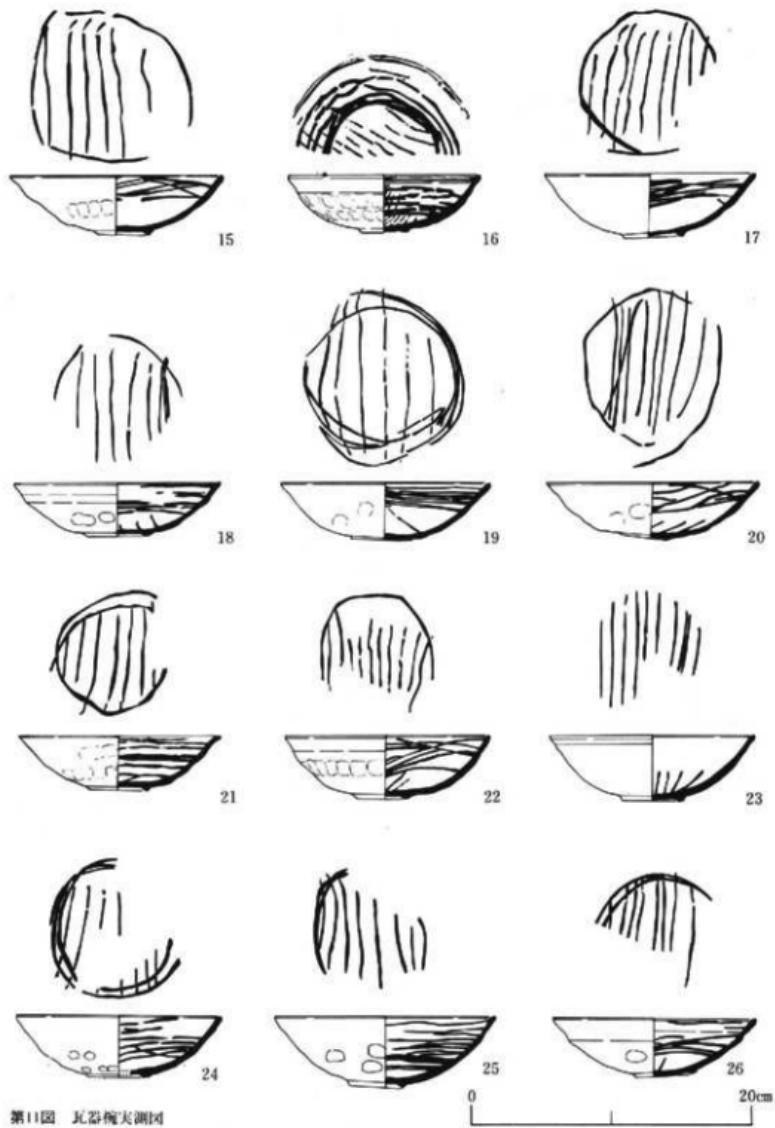
土師器皿と同様の比率で出土した。口径8~9cmを小皿、以上を中皿とした。小皿は外面底部を指頭圧痕、口縁部を強いヨコナデで調整。ヨコナデは一度である。口縁部は外反し、端部は丸く終る。口縁部の稜線は明瞭である。内面のヘラミガキ、見込みの暗文によりA~D類に分類した。



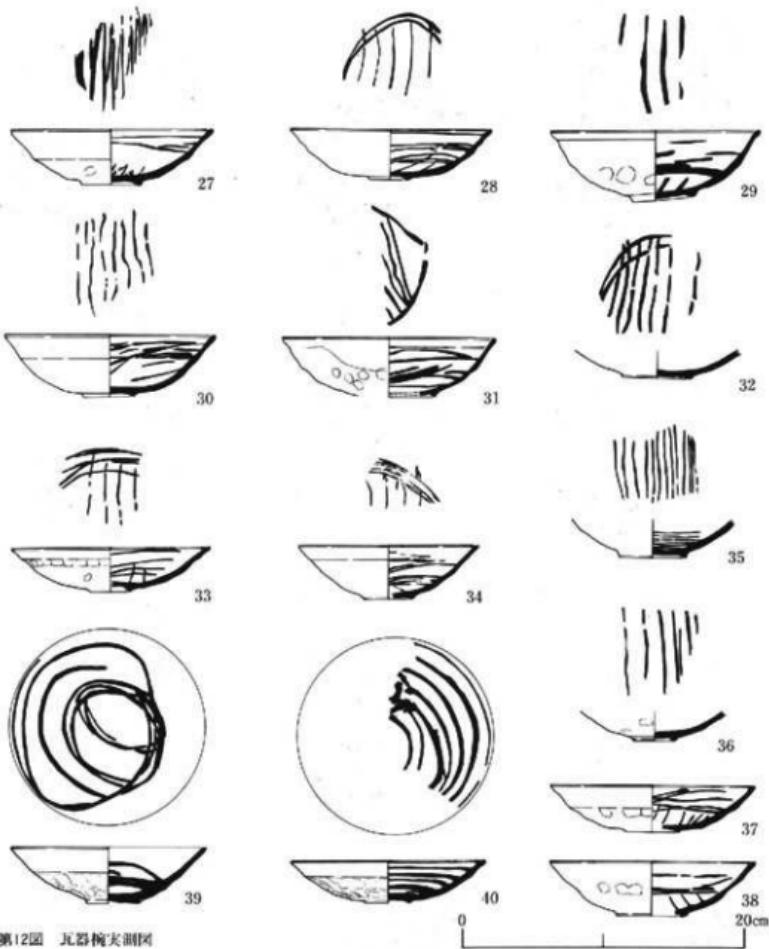
第2表 瓦器皿分類表



第10図 瓦器横断面図



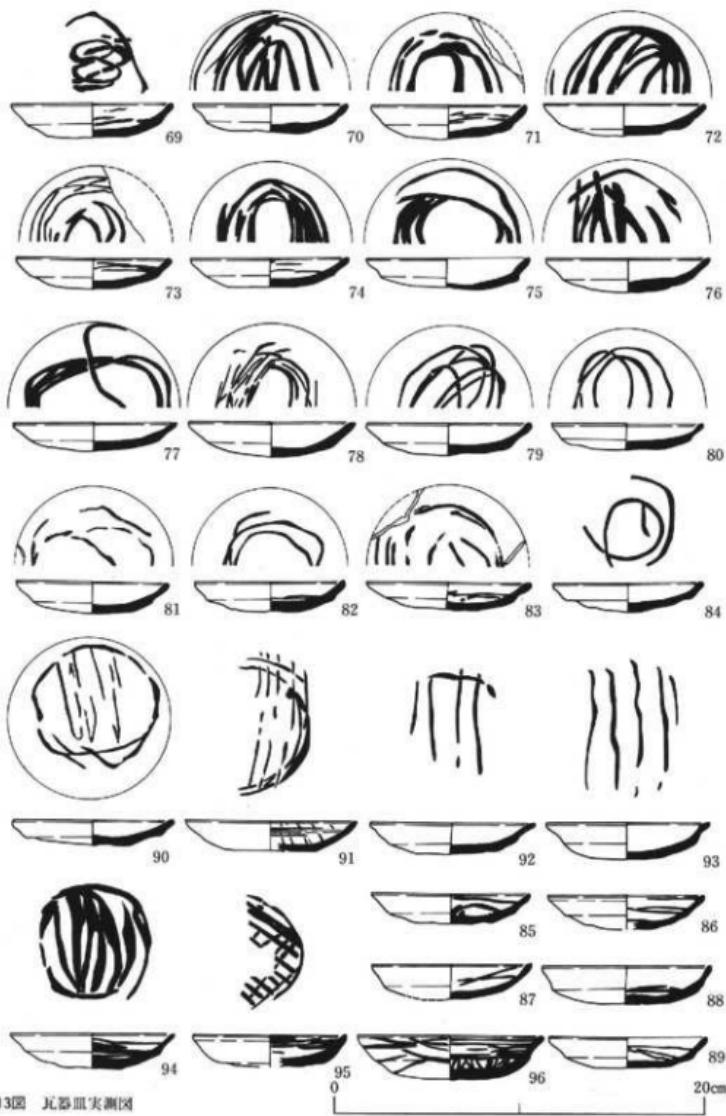
第10図 瓦器概観図



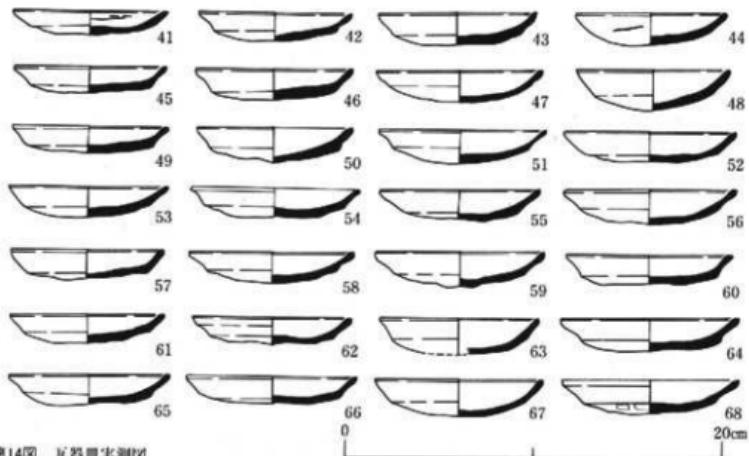
第12図 瓦器検査図

A類は内面に荒いラセン状のヘラミガキを施す。B類は見込みに平行線文を施す。C類は細かい格子状の暗文を持つ。D類はヘラミガキ、暗文ともに施さない。A類とD類が大半を占める。B類はわずかである。C類は岡化した1点のみである。

E類とした96は中皿である。外面は口縁部に強いヨコナデを施し、ヘラミガキする。そのため、稜線は不明瞭となる。内面は密なヘラミガキを施す。ヘラミガキは小皿と異なるが、調整技法は同種と観察できる。



第13圖 瓦器皿實測圖



第14図 瓦器皿実測図

## 2). 土師器

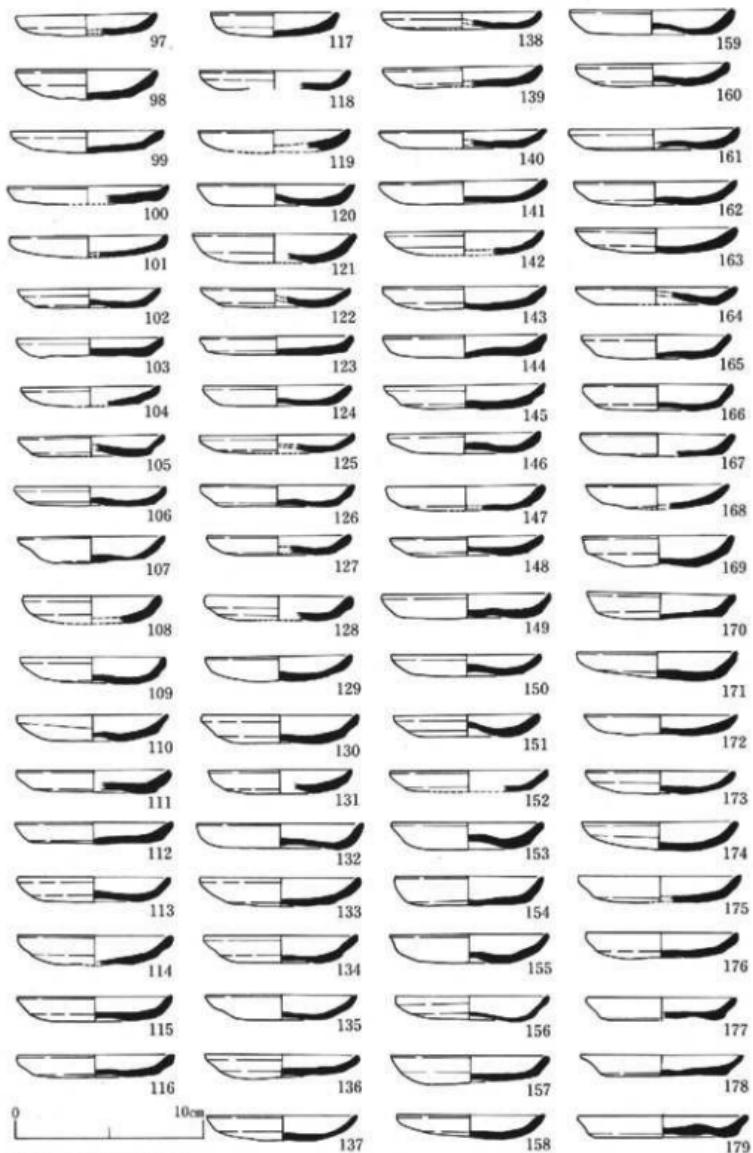
土師器皿は調整技法、法量によって分類した。小皿は口径 9 cmまでのもの、中皿は 10 cm前後、以上を大皿とした。

A 類は口縁部と口縁端部を 2 度ヨコナデする。そのため、口縁端部が立ち上がり、尖り気味に終るものと、丸く終るものがある。底部と口縁部の境に明瞭な稜線が認められるもの、弱いヨコナデのため不明瞭なものがある。A<sub>1</sub>類は器高が低く、2 度のヨコナデを施すものの、稜線が不明瞭となる。底部は丸みを帯びるか、平坦である。A<sub>2</sub>類は底部があげ底気味になる。A 類中皿は形態は小皿と変わらない。大皿は全体に調整が丁寧になり、全体にナデを施し、底部の指頭圧痕がきえているものが多い。

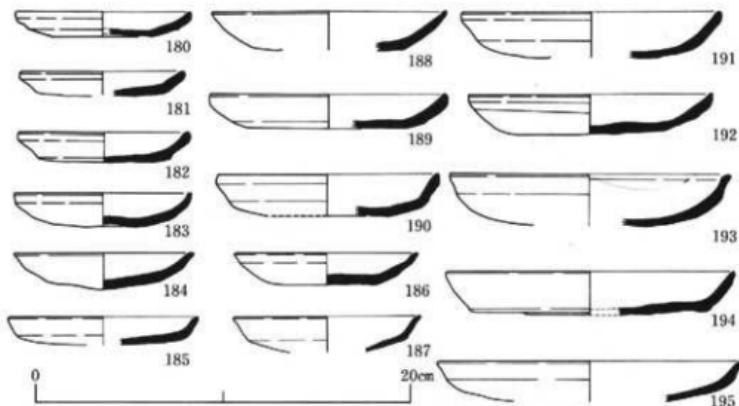
B 類は口縁部のヨコナデが 1 度のものである。底部との境は明瞭な段がつき、端部は丸く終るものと、尖り気味に外反するものがある。底部は平坦なものが多い。

	小 皿	中 皿	大 皿
A			
B			

第3表 土師器皿分類表



第15図 土師器小形実測図



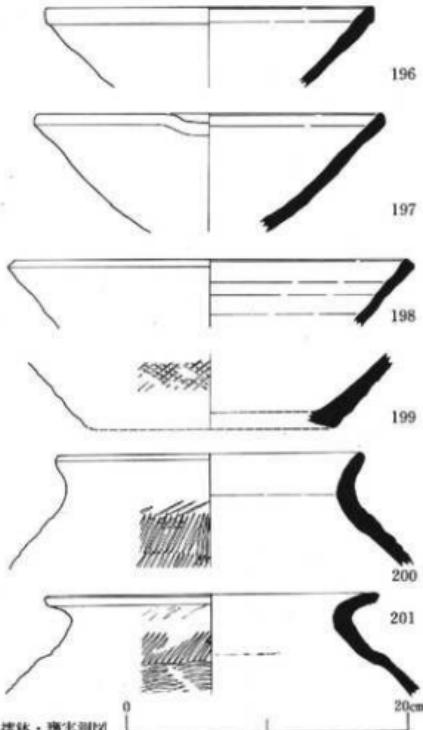
第16図 土師器中皿・大皿実測図 (A類180~184・190~194, B類185~187・195)

B類中皿は精選された胎土を使用し、丁寧な調整を施す。底部との境には明瞭な棱線がつく。口縁部は外方にのび、端部が外反する。底部は平坦なものと、丸みを帯びるものがある。大皿は口径16.4cm、器高約2.4cmの浅いものである。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く終る。調整は丁寧である。

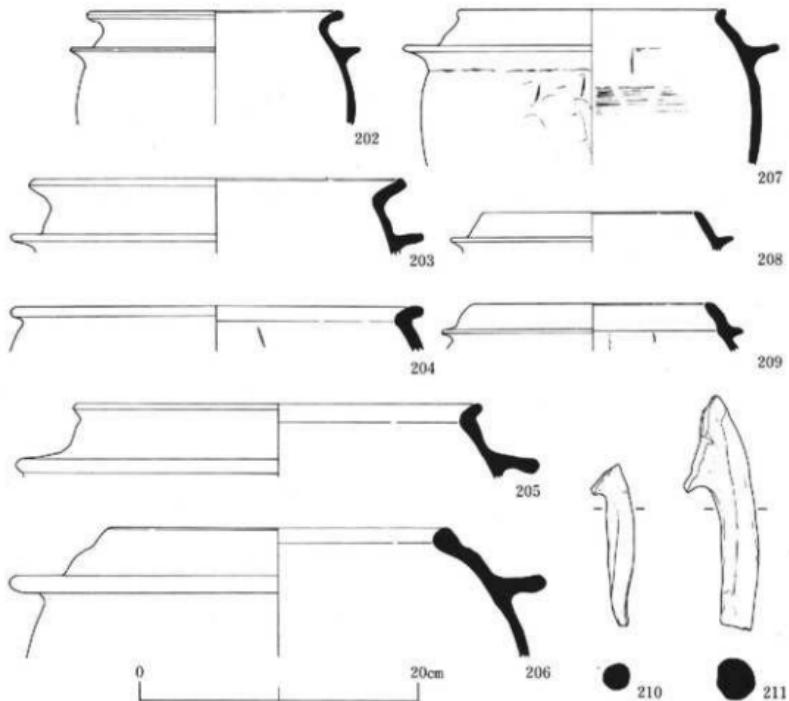
土器溢り出土の土師器皿のうち、調整技法、法量等から型式の判定できるものの総点数は821点である。小皿はその内685点を数える。各型式毎の比率は破片を1点として割り出すと、A<sub>1</sub>類は28点、4.0%、A<sub>2</sub>類は634点、92.6%、B類23点、3.4%となる。A類をまとめた場合、662点、96.6%を占める。

中皿は129点の内、A類116点、88.8%、B類13点、11.2%となる。

大皿は出土点数が7点と少量のため比較できない。



第17図 楷鉢・箋実測図



第18図 羽鉴実測図

### 描鉢

今回出土した描鉢はいずれも須恵質であり、東播系のものである。196・197は逆八の字に開く体部より、口縁部はわずかに内傾する。口縁端部は尖り気味に終る。196は口縁部付近に煤が付着する。198は逆八の字に開く体部から、口縁部が面をもって終る。

### 甕

199・200は須恵質の甕である。199は焼成が悪く、瓦質とも言える。外面に格子状のタタキ、内面はヨコナデ、ナデを施す。200はゆるやかに屈曲する頸部から短く外方へ開く口縁部を持つ端部は丸く終る。201は土師質の甕である。大きく屈曲する頸部から強く外反する口縁部を持つ。端部は面をもち、わずかに上方へ尖り気味に終る。

### 羽釜

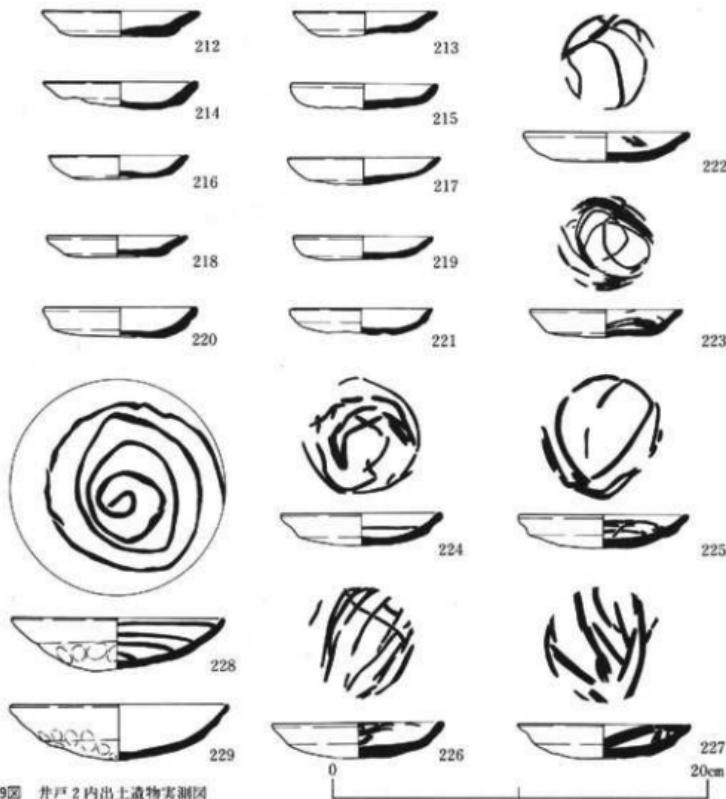
口縁部が深く内傾しながら立ち上がり、くの字状に外反するもの（202～205・207）と、端部をわずかに外方へ肥厚させるもの（206）がある。他に、瓦質の脚を有するものがある。

3). 井戸 2 内出土遺物

井戸内より出土した土器は、土師器小皿、瓦器小皿、瓦器椀である。このうち、212は掘り方、228・229は井戸廃絶期のものである。他は、井筒内最下層である。

土師器小皿では、212～216・228がA類、217～219がB類である。瓦器小皿では、ラセン状の暗文を有するA類(222～225)と、平行線文をもつB類(226・227)がある。瓦器椀は前述の型式分類に従えば、k型式にあたる。口縁部のヨコナデは強く、明瞭な稜線を有する。高台は退化し、消失している。

いずれも完形品であり、井戸に投棄されたものである。土師器小皿の形式毎の比率は土器溜り出土遺物とは異なり、B類が高い比率を示している。瓦器小皿は土器溜り全体の様相に近いと考えられる。土器溜り出土の瓦器椀と比較すると228・229は1形式新しくなり、井戸の存続期間は短いと考えられる。



第19図 井戸 2 内出土遺物実測図

## IV.まとめ

今回の調査では遺構面が4面検出できた。また、良好な土器群の出土もあり、これらのことから今後の調査に向けての問題点と、明らかになった点をまとめてみたい。

1. 第1遺構面で検出した畦畔は、第35次調査や山賀遺跡の調査でも確認されており、その結果から、水田が営まれた時期は弥生時代後期と考えられる。<sup>8</sup>
2. 第3遺構面と第3'遺構面の間は建て替えに伴う整地層と考えられ、時間差は少ないと推定される。
3. このことは、整地層に含まれる土器溜り出土遺物を観察すると、調整技法から1形式程度の差が認められることと一致する。
4. 遺物については、土師器皿の大半が2度ナデを施すA類であるが、瓦器小皿では技法上では新段階の1度ナデのみとなる。また、大型の瓦器椀(1)は従来の形式には入らず、今回出土のh-i型式のものと考えたい。高台の形状は法量からの影響であり、調整技法から変化は認められない。
5. したがって、第3遺構面および第3'遺構面の時期は13世紀中から後半の間と考えられる。

### 注

1. 藤井直正・下村晴文・勝田邦夫『若江寺跡・若江城跡』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15 東大阪市教育委員会 1975
2. 勝田邦夫・阿部嗣司『若江遺跡発掘調査報告I 遺構編』東大阪市遺跡保護調査会 1982
3. 梶山彦太郎・市原実『統大阪平野発達史』古文物研究会 1985
4. 勝田邦夫・松田順一郎・阿部嗣司『若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報』『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』東大阪市遺跡保護調査会 1981
5. 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』青木書店 1986
6. 「若江遺跡の現状と展望」『調査会ニュース』No20 東大阪市遺跡保護調査会 1981. 4
7. 勝田邦夫・阿部嗣司『若江遺跡発掘調査報告書I 遺物編』財團法人東大阪市文化財協会 1983
8. 勝田邦夫『若江遺跡第35次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会 1988

## V. 過去における若江遺跡の調査

### 1. 調査一覧

この調査一覧は、東大阪市市制施行（昭和42年）以後に実施された調査のみを記した。調査次数は必ずしも調査時期順に付されてはいない。調査内容は、調査面積、調査原因、検出された主な遺構、遺物の順に記した。文献では、各調査の報告書、資料紹介、論文等を記した。番号は若江遺跡関係文献の番号である。調査主体の略号は以下のとおりである。なお、現在の遺跡区分では隣接する遺跡にまたがる調査があるが、調査内容等から、あえて若江遺跡の調査歴としてまとめた。調査内容の末尾にその遺跡名を記した。

市………東大阪市教育委員会

調………東大阪市遺跡保護調査会

協………財団法人 東大阪市文化財協会

調査 次數	調査開 始年月	調査 主体	調査の内 容	文献
1	47・12	調	420m <sup>2</sup> 。学校建設工事。若江遺跡の本格的な発掘調査が開始。室町時代を中心とした土槽状遺構、柱穴、溝、井戸（4基）を検出。調査結果より建築を設計変更され、埋め戻して保存。文字瓦（広刀目・足得）が出土。	
2	49・5	調	174m <sup>2</sup> 。下水道管理工事。室町時代の曲物井戸1基検出。（巨摩庵寺）	16
3	10	調	50m <sup>2</sup> 。学校建設工事。室町時代の溝3条を検出。	
4	11	調	330m <sup>2</sup> 。府道拡張工事。近世の木組み井戸1基を検出。室町時代の土器、瓦が出土。	2
5	11	市	350m <sup>2</sup> 。国庫補助事業。若江城の建物礎石列、塙列を検出。他に瓦積み井戸、溝を検出。（山賀）	3
6	50・6	調	75m <sup>2</sup> 。下水道管理工事。近世の井戸1基と溝を検出。鎌倉時代～近世の土器、瓦が出土。	16
7	51・2	調	57m <sup>2</sup> 。ガス管理工事。室町時代の溝を検出。同時期の土器が少量出土。（若江北）	5
8	52・1	調	80m <sup>2</sup> 。下水道管理工事。室町時代の土器が出土。（若江北）	6
9	7	調	150m <sup>2</sup> 。学校建設工事。鎌倉～室町時代の溝、井戸、ピット、土塙を検出。整地層を確認。弥生～室町時代までの土器が出土。	
10	11	調	200m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。中世の溝、土塙、井戸、ピットを検出。同時期の土器が出土。	18 20
11	12	調	110m <sup>2</sup> 。下水道管理工事。鎌倉～室町時代の土器が出土。	
12	12	調	540m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。中世のシガラミ状遺構、井戸7基、溝、土塙を検出。中世の集落跡と考えられる。	7 18 20

調査 次数	調査開 始年月	調査 主体	調査の内 容	文献
13	53・3	調	100m <sup>2</sup> 。学校建設工事。遺構は無し。室町～江戸時代の土器が少量出土。	
14	7	調	980m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。平安～江戸時代の井戸17基、井戸状遺構、溝、土塹、柱穴、集石遺構を検出。土器、石製品、木製品、金属製品、自然遺物が多量に出土。	10 18 20
15	12	調	50m <sup>2</sup> 。下水道管理設工事。弥生時代後期の包含層を検出。	16
16	53・12	市	30m <sup>2</sup> 。国庫補助事業。中世壠立柱建物、井戸検出。(巨摩庵寺、山賀)	8
17	54・11	調	692m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。鎌倉～室町時代の井戸、溝、土塹、柱穴を検出。若江城の堀と考えられる東西方向の溝を検出。多量の土器と銭貨、かんざし、漆器碗、下駄、石臼などが出土。	10 11 13 14 18 20
18	55・1	市	30m <sup>2</sup> 。国庫補助事業。鎌倉～室町時代の壠立柱建物、土塁積井戸、土塹、溝を検出。	12
19	10	市	100m <sup>2</sup> 。学校建設工事。鎌倉時代の井戸、溝を検出。	
20	10	調	550m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。東西方向に走る若江城の堀を検出。他に中世の井戸、溝、土塹を検出。多量の土器、瓦、鉄錢、庖丁などが出土。	15 22 29
21	11	調	40m <sup>2</sup> 。下水道管理設工事。室町時代の溝とそれに伴う護岸施設と考えられる杭を検出。弥生時代前期の遺物包含層を確認。(山賀)	16
22	56・4	市	100m <sup>2</sup> 。国庫補助事業。若江城の土塙状遺構、壠立柱建物、石列溝状遺構、堀を検出。	17
23	57・1	調	100m <sup>2</sup> 。下水道管理設工事。弥生後期の落込みと杭を検出。(若江北)	
24	57・2	調	300m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。整地層を3面確認。建物路の礎石を検出。20次調査で検出した堀の続きを確認。堀内より瓦、礎石、壁下地が投げ込まれた状況で出土。建物を取り壊したと考えられる。	29
25	10	協	65m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。若江城の堀を検出。	25
26	58・1	協	40m <sup>2</sup> 。下水道管理設工事。中世の大溝を検出。礎が出土。	21
27	10	協	410m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。若江城の南北方向の堀2条と博列建物を検出。堀内からは24次調査と同様に瓦、礎石、壁下地が出土。鉄製品が多量に出土。鎌倉時代の柱穴、井戸、土塹、溝も検出。	27
28	59・3	協	254m <sup>2</sup> 。マンション建設工事。鎌倉時代の井戸、土塹、壠立柱建物、溝と近世の溝を検出。	
29	11	協	214m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。鎌倉時代の井戸、柱穴、土塹、溝を検出。道路の南限を確認。(若江北)	29
30	7	協	405m <sup>2</sup> 。送電線埋設工事。27次調査地の南2mを同様の長さで調査。遺構の続きを確認。	
31	60・9	協	157m <sup>2</sup> 。送電線埋設工事。古墳時代のピットと鎌倉～室町時代の溝、土塹、ピットを検出。	

調査 次數	調査開 始年月	調査 主体	調査の内 容	文献
32	60・10	協	162m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。若江城の東堀を検出。土星が存在したことが判明した。堀内から木簡、銭の弾丸などが出土。	23
33	61・1	協	268m <sup>2</sup> 。道路拡張工事。弥生時代中期の溝、平安時代の土塙、溝を検出。弥生時代の溝は方形周溝墓の可能性あり。	
34	9	市	25m <sup>2</sup> 。国庫補助事業。近世の土塙、溝を検出。	24
35	62・5	協	256m <sup>2</sup> 。マンション建設工事。近世の井戸2基、溝4条、室町時代の井戸4基、溝13条、弥生時代後期の水田畦畔を検出。	28
36	8	協	131m <sup>2</sup> 。小学校プール建設工事。近世の井戸2基、溝1条、室町時代、若江城の堀、柱穴を検出。	
37	12	協	253m <sup>2</sup> 。マンション建設工事。近世の溝1条、室町時代、若江城の堀を検出。	
38	63・6	協	762m <sup>2</sup> 。小学校体育館建設工事。室町時代、若江城の堀、土橋、弥生時代後期の水田畦畔を検出。	
39	9	協	375m <sup>2</sup> 。下水道管理設工事。室町時代、若江城関連の石垣を検出。	
40		市	住宅建築工事。室町時代(16世紀後半)の土器が多量に出土。	
41	5	協	334m <sup>2</sup> 。住宅建築工事。室町時代、若江城の堀を検出。	
42	1・2	協	280m <sup>2</sup> 。住宅建築工事。室町時代、若江城の堀、跡地～室町時代の溝、柱穴を検出。	

## 2. 若江遺跡関係文献一覧

この一覧は、各調査報告、資料紹介、論文等の刊行物を記した。若江城関係の古文書、絵図等の資料は各刊行物に記載されているが、ここでは省略している。

- 新田洋「府道四条—長堂線道路工事に伴う若江城跡の調査」『調査会ニュース』No.1 東大阪市遺跡保護調査会 1975. 1
- 新田洋ほか「若江城跡・北鳥池遺跡調査報告」東大阪市遺跡保護調査会 1975
- 藤井直正、勝田邦夫、下村晴文「若江寺跡・若江城跡」東大阪市教育委員会 1975
- 上野利明「公共下水道第20工区管渠築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」『調査会ニュース』No.3 東大阪市遺跡保護調査会 1976. 3
- 糸魚川淳二、西村昭、岡崎美彦「東大阪市若江北町出土の泥土の分析」『調査会ニュース』No.6 東大阪市遺跡保護調査会 1976. 12
- 福永信雄「公共下水道第16工区管渠築造工事に伴う若江遺跡の発掘調査」『調査会ニュース』No.9 東大阪市遺跡保護調査会 1977. 12
- 勝田邦夫「府道四条—長堂線拡幅工事に伴う若江遺跡の発掘調査」『調査会ニュース』No.10 1978. 1
- 下村晴文ほか「鬼塚遺跡II・若江遺跡発掘調査報告」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19 東大阪市遺跡保護調査会 1979. 3

9. 阿部嗣治 「若江道路出土の土馬」『調査会ニュース』No15 東大阪市道路保護調査会 1980. 1
10. 勝田邦夫 「府道四条一長堂線拡幅工事に伴う若江道路の発掘調査」『調査会ニュース』No15 東大阪市道路保護調査会 1980. 1
11. 「若江道路内設置の国土座標基準杭」『調査会ニュース』No16 東大阪市道路保護調査会 1980. 3
12. 勝田邦夫 「若江道路3D-U8地区の調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要1979年度』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報21 東大阪市教育委員会 1980. 3
13. 阿部嗣治 「若江道路出土のS字状口縁土器」『調査会ニュース』No18 東大阪市道路保護調査会 1981. 1
14. 阿部嗣治 「府道四条一長堂線拡幅工事に伴う若江道路の発掘調査」『調査会ニュース』No19 東大阪市道路保護調査会 1981. 2
15. 木下密運 「若江城址出土大般若経伝説の木札」『調査会ニュース』No20 東大阪市道路保護調査会 1981. 4
16. 勝田邦夫、阿部嗣治ほか 「若江道路・山賀道路発掘調査概報」『東大阪市道路保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市道路保護調査会 1981. 10
17. 下村晴文、上野利明 「半堂道路・若江道路発掘調査概報」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要23』東大阪市教育委員会 1982. 3
18. 勝田邦夫、阿部嗣治ほか 「若江道路発掘調査報告書I 造構編」東大阪市道路保護調査会 1982. 3
19. 阿部嗣治 「大阪・若江道路」『木簡研究』木簡学会 1982. 11
20. 勝田邦夫、阿部嗣治 「若江道路発掘調査報告書I 造物編」財團法人東大阪市文化財協会 1983. 3
21. 原田修、吉村博恵、阿部嗣治、上野利明 「瓜生堂道路・若江道路発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』財團法人東大阪市文化財協会 1984. 3
22. 中西克宏 「若江道路出土の古墳時代遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.1、No.1 財團法人東大阪市文化財協会 1985. 8
23. 勝田邦夫 「若江道路出土の木製品」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2、No.1 財團法人東大阪市文化財協会 1986. 8
24. 勝田邦夫ほか 「握手道路・若江道路の調査昭和61年度」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28』東大阪市教育委員会 1987. 3
25. 吉村博恵ほか 「若江道路第25次発掘調査報告」財團法人東大阪市文化財協会 1987. 3
26. 萩田昭次、勝田邦夫ほか 「東大阪市文化財協会ニュース」Vol.2、No.3 財團法人東大阪市文化財協会 1987. 3
27. 才原金弘 「若江道路第27次発掘調査報告」財團法人東大阪市文化財協会 1988. 3
28. 勝田邦夫 「若江道路第35次発掘調査報告」財團法人東大阪市文化財協会 1988. 3
29. 上野利明、吉村博恵 「若江道路第29次発掘調査報告」財團法人東大阪市文化財協会 1989. 3

### 3. 第20・24次調査の概要

#### 調査の経過

第20次調査は昭和55年度、第24次調査は昭和56年度の府道大阪東大阪線の改良工事に伴い実施したものである。

第20次調査は昭和55年10月13日～11月10日に歩道橋の移設工事に伴う南橋脚部の一部（20-1地区）と同年11月11日～昭和56年2月7日に南拡幅部の一部（20-2地区）の2ヶ所、第24次調査は昭和57年1月5日～同年5月10日にかけて、歩道橋移設工事に伴う南・北橋脚部（24-2地区、24-3地区）と北橋脚建設に伴い移転した建物建設予定地（24-1地区）3ヶ所について実施した（付図1参照）。この2次の調査においては堀、溝、土塙、ピットなどの各種遺構と上師器、瓦器、陶磁器、木製品などの多量の遺物を検出した。今回、各地区で検出した遺構についてその概要を記す。

#### 20-1地区

基本層位は以下のとおりである（第20図）。

第1層 盛土

第2層 暗灰色シルト質砂（耕土）

第3層 暗青灰色シルト 土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器の小片含む。

第4層 暗青灰色シルト質砂 上師器、瓦器、瓦の小片含む。第1遺構面。

第5層 黄褐色粘土 第2遺構面。

第6層 暗青灰色粘土 土師器、瓦器含む。

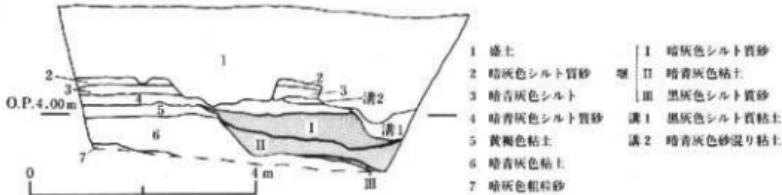
第7層 暗灰色粗粒砂

遺構は第4層上面（第1遺構面）と第5層上面（第2遺構面）で検出した（第21図）。

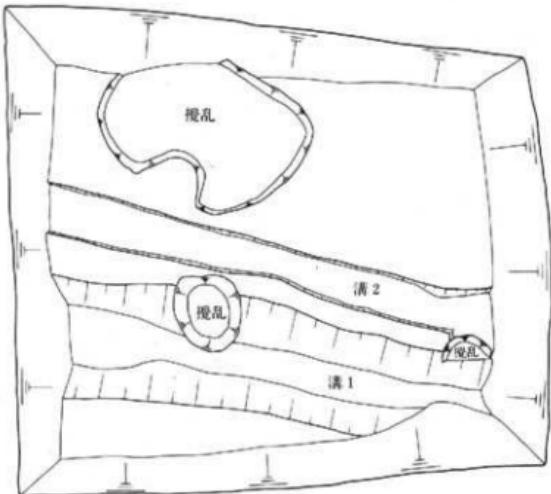
第1遺構面では2条の溝（溝1、溝2）を確認した。溝1は幅1.8～2.1m、深さ0.6～0.8mを測り、東南東→西北西に走る。溝断面はU字形を呈している。溝内は黒灰色シルト質粘土で、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、木製品など多くの遺物が出土した。溝2は幅0.7～0.8m、深さ0.2mを測り、溝1とはほぼ平行して走っている。溝断面は逆台形状を呈する。溝内は暗青灰色砂混り粘土で、土師器、瓦器などの小片が出土した。

2条の溝は出土遺物などから16世紀末～17世紀前半のものと思われる。

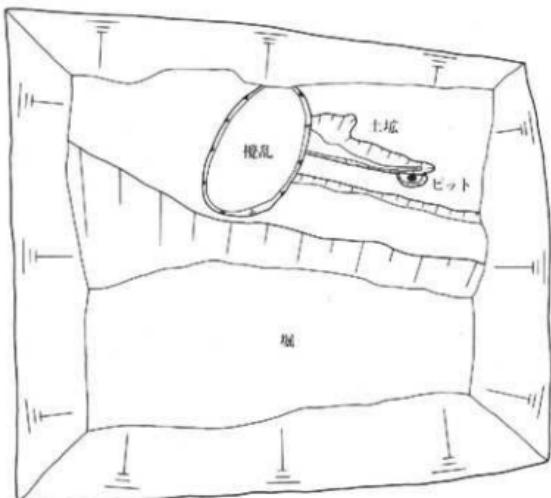
第2遺構面では堀、土塙、ピットを検出した。堀は北肩を確認した。調査地内の幅6～4



第20図 20-1地区東壁断面図



第1造構面



第2造構面

0

5m

第21図 20-1地区平面実測図

m、深さ約1mを測り、ほぼ東西方向に走っている。堀は2段に落ちるところと一段のところがある。堀内は暗灰色シルト質砂(I)の埋土層と暗青灰色粘土(II)、黒灰色シルト質砂(III)の堆積土層に分かれる。埋土内からは多量の瓦とともに土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、須恵器、石製品(砥石、石鍋など)が出土し、堆積土内からは土師器、瓦、木製品(漆器椀、下駄、板状木製品など)、動・植物遺体が出土した。堀は出土遺物などから16世紀後半に廃絶している。土塙は不定形で、ピットは2段掘りの円形を呈する。ピットが土塙に先行するが、ともに遺物はほとんど出土していない。

#### 20-2地区(第23図)

基本層位は以下のとおりである。

第1、1'層 盛土

第2層 茶灰色細粒砂 土師器、瓦器、陶器、磁器の小片含む。

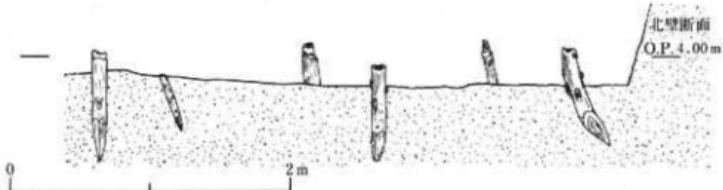
第3層 茶褐色細粒砂  
第4層 茶灰褐色砂 } 近世以降の溝内埋土。土師器、瓦器、瓦出土。

第5層 青緑色シルト 無遺物

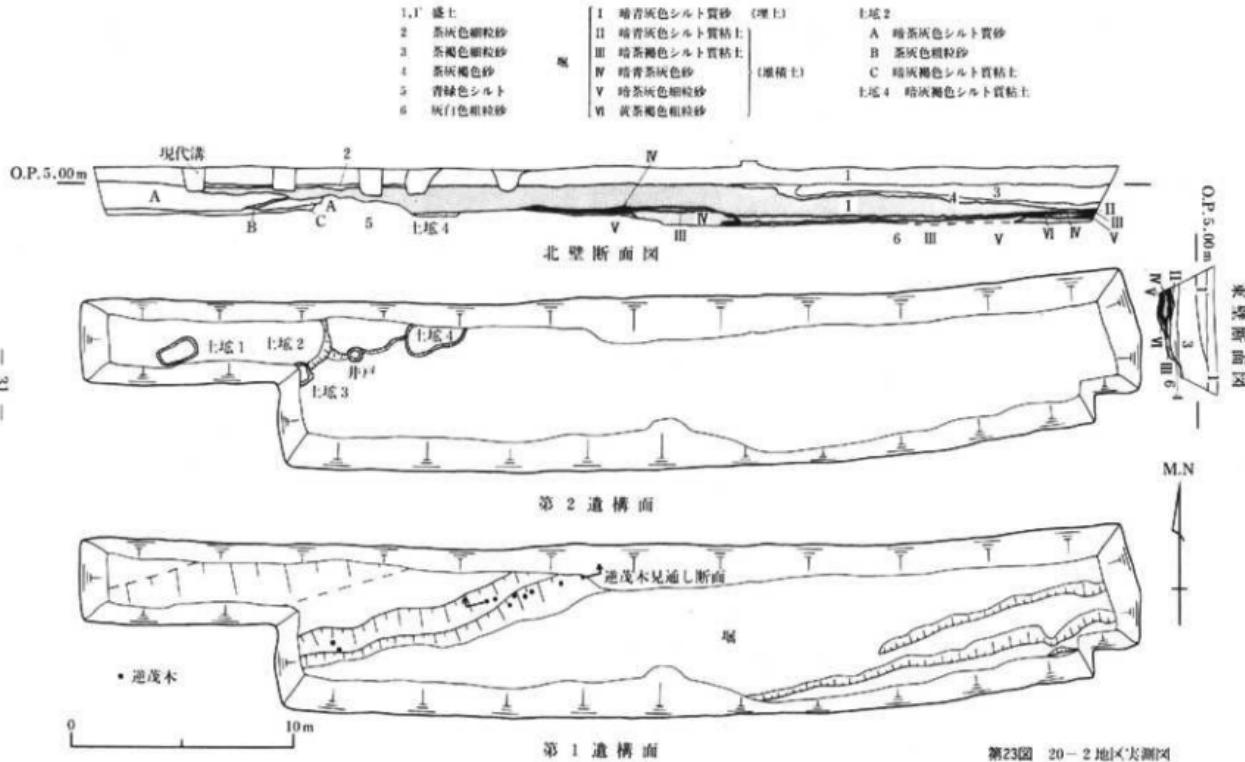
第6層 灰白色粗粒砂 無遺物

遺構は堀埋土上面で近世以降の溝を確認し、北肩が土塙2埋土上面より落ちる堀(第1遺構)、第5、6層上面で土塙、井戸(第2遺構)を検出した。

堀は調査地のほぼ全域に広がっている。北肩の上部は後世の擾乱により一部確認したのみであり、南肩上部も一部検出しただけである。堀は若干南にふっているが、ほぼ東西に走っている。堀上部の幅は不明であるが15m以上あったと考えられる。底部幅は6~7m、深さ1.7mを測る。南・北側壁は2~3段に掘り込まれており、底面はフラットになっている。北側の2段目と3段目の境には逆茂木と考えられる杭を9本以上打ち並べている(第22・23図)。杭は径15cm前後のものと径5cm前後のものがあり、残存長は80~20cmを測る。堀内は暗青灰色シルト質砂(I)の埋土層と暗青灰色シルト質粘土・暗茶褐色シルト質粘土・暗青茶灰色砂・暗茶灰色砂・黄茶褐色粗粒砂(II~VI)の堆積土層に分かれる。埋土内からは多量の瓦と土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、須恵器などが出土し、堆積土内からは土師器、瓦、木製品(漆器椀、下駄、箸、曲物、木簡一岡版27ー、杭など)、金属製品(貨銭、鉄鎌、庖丁、鉄釘、鉄砲玉など)、動・植物遺体が出土した。堀は出土遺物などから16世紀後半に廃絶したと思われる。



第22図 20-2地区逆茂木見通し断面図



第2造構では4基の土塙と1基の井戸を検出した。井戸は径0.65m、深さ0.6mを測り、埋土は暗褐色シルト質粘土で、瓦器陶、土師器皿などが出土した。土塙1は土塙2の底面で検出し、長辺1.8m、短辺1.0m、深さ0.15mを測り、隅丸の長方形を呈する。土塙2～4は不定形な土塙である。各土塙内からは土師器、須恵器、瓦器の小片が出土した。これらの造構は13世紀後半～14世紀後半のものと考えられる。

#### 24-1 地区（第24図）

基本層位は以下のとおりである。

##### 第1層 盛土

- 第2層 茶灰色砂 土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器の小片若干含む。  
第3層 黄茶褐色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦片と若干の炭含む。  
第4層 茶褐色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦、須恵器、炭を含む。第1造構面。  
第5層 接灰色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦、須恵器、炭を多く含む。  
第6層 暗茶褐色砂質シルト 土師器、瓦器、須恵器、炭を含む。 } 第2、2'造構面。  
第7層 黄灰褐色シルト 須恵器、土師器片含む。第3造構面。  
第8層 明黄褐色シルト 無遺物。

第1造構面は第4層上面で土塙1基、溝1条、ピット2個を検出した。各造構内からは土師器、瓦器、磁器の小片が若干出土し、近世以降のものと思われる。

第2、2'造構面は第5層上面で土塙1基（土塙2）を確認し、第6層上面で土塙2基（土塙3、土塙4）とピット2個を検出した。第5層には多量の遺物とともに焼土が含まれていた。土塙4はトレンチ南東部で南北2.7m以上、東西2.6m以上、深さ0.5mを測り、多量の瓦、土師器と壁土（黄褐色粘質土）や焼土が出土し、炭も多く含んでいる。出土遺物などから16世紀後半のものと思われる。

第3造構面は第7層上面で土塙1基（土塙5）とピット17個を検出した。ピットは柱穴であるが、調査範囲が狭く建物の状態は確認できない。これらの造構は出土遺物などから14世紀代のものと考えられる。

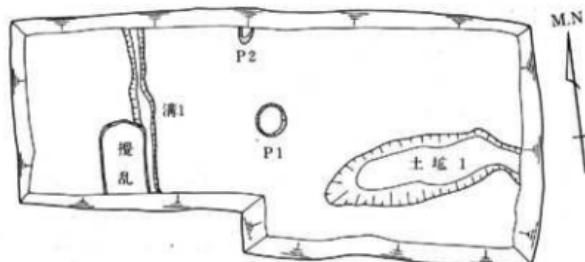
#### 24-2 地区（第25図）

歩道橋南橋脚部の調査。基本層位は以下のとおりである。

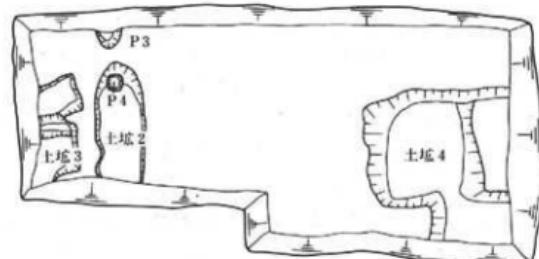
##### 第1、1'、1''層 盛土

##### 第2層 旧耕土

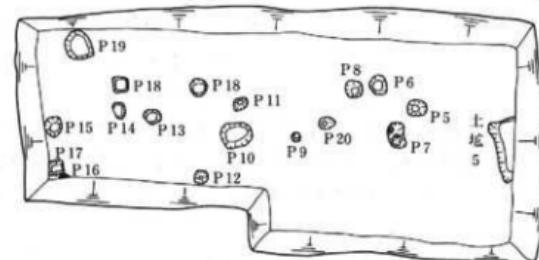
- 第3層 暗灰青色砂質シルト 土師器、瓦器小片を若干含む。  
第4層 暗灰褐色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦の小片を含む。  
第5層 黄褐色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器含む。  
第6層 黄褐色粘土質シルト 土師器、瓦器、瓦片含む。  
第7層 青灰白色シルト 無遺物。  
第8層 青灰褐色粘土 植物遺体を含む。



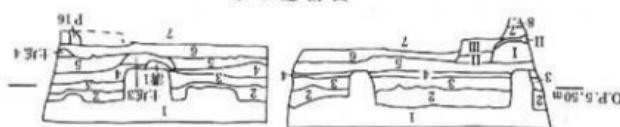
第1造構面



第2, 2造構面



第3造構面



南壁断面図

- |             |              |              |
|-------------|--------------|--------------|
| 1 盛土        | 7 黄灰褐色シルト    | 土塙 4         |
| 2 茶灰色砂      | 8 明黄褐色シルト    | I 暗褐色砂質シルト   |
| 3 黄茶褐色砂質シルト | P16 鮑灰色砂質シルト | II 暗茶褐色砂質シルト |
| 4 茶褐色砂質シルト  | 土塙 2 明灰褐色砂   | III 茶灰色砂     |
| 5 暗灰褐色砂質シルト | 土塙 3 茶灰褐色砂   | 講 1 茶灰色砂質シルト |
| 6 喀茶褐色砂質シルト |              |              |

第24図 24-1地区実測図

- 第9層 灰青褐色細粒砂 無遺物。
- 第10層 黒褐色粘土 若干シルト質、瓦器、土師器片含む。
- 第11層 青灰色シルト 無遺物。第3造構面。
- 第12層 青黄灰色砂 無遺物。
- 第13層 黄青色粗粒砂 無遺物。

造構は溝を第4層上面（溝1）と第5層上面（溝2）を確認し、第7層上面で堀、第11層上面で井戸を検出した。

堀はトレンチ全域にわたる。トレンチ内では堀北側の斜面と底面の一部を確認した。検出面からの深さは1.1mを測る。堀の北側壁は2段に掘られており、段は幅1.5m前後のフラットな面をなしている。段からはさらにゆるやかに傾斜して底面に達している。底面は凸凹がほとんどなくフラットである。段および傾斜面の状態から堀は若干南にふりながらも東西に走っていたことがわかる。堀内は5層に分層できるが、すべて埋土である。埋土の各層は遺物を含んでいるが、とくにII層（暗青褐色砂質シルト）内からは多量の瓦とともに土師器、瓦器、陶器、磁器、木製品などと壁下地、礎石を検出した。多くの瓦と壁下地、礎石などはトレンチ東側の2段目の傾斜面にはりつくようにして出土した。

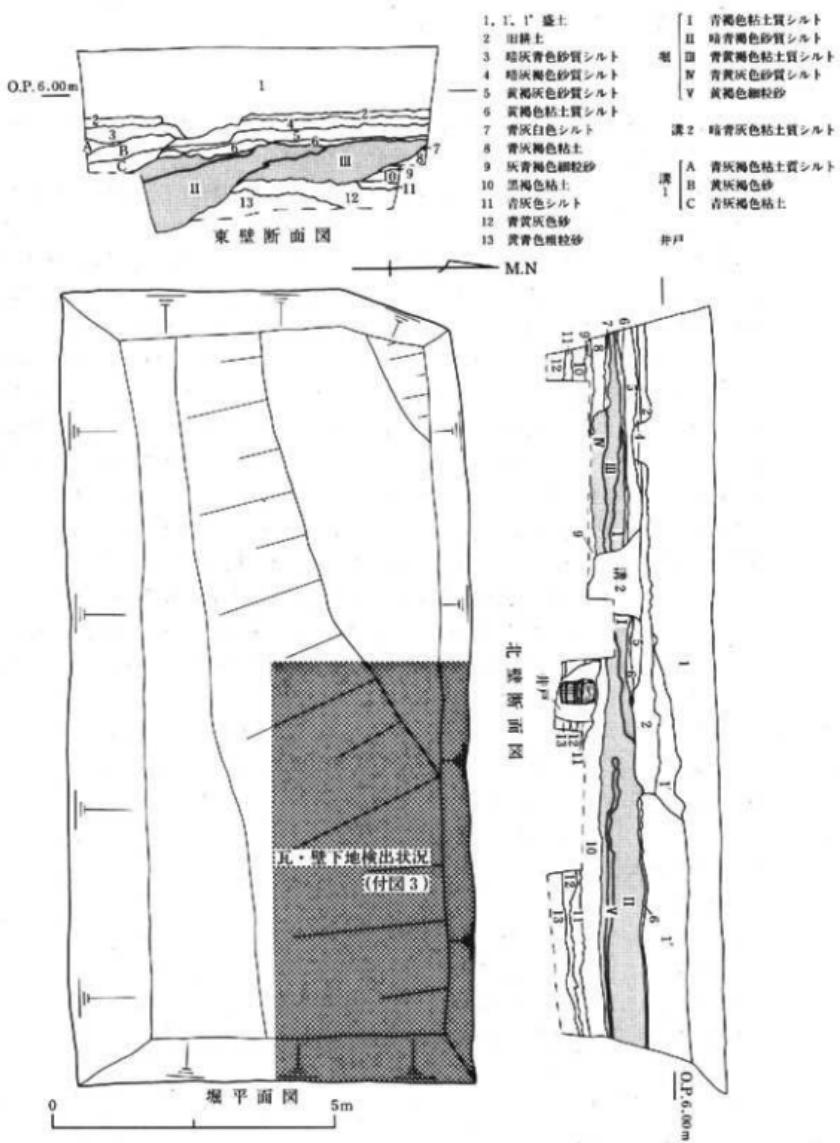
検出した壁下地は幅1.1m、長さ1.5mが残存している。中央に幅10cmの抜板を据え、半截した竹や板材を10cm前後の幅で格子状に組み、交差部を縛りしめつけている。壁下地の周囲からは壁土を多く検出した。（図版29～31、付図3参照）。礎石は一面を平らに加工したものであり、0.3～1.5m大のものを16個検出した。瓦、壁下地、礎石の検出状況から、北側にあった建物を上屋から順次取り壊して棄てていったと考えられる。その時期は出土遺物などから16世紀後半と思われる。

井戸は径1.25m、深さ0.8mを測る円形の掘方である。井側は幅6cm、長さ35cmの板を径39cmの円形に組み3段のタガを有する桶を下段に有し、上段には径43cm、残存高27cmの曲物を据えている。井戸内からは土師器、瓦器、須恵器片が少量出土した。出土遺物などから13世紀代のものと思われる。

#### 24-3地区（第26・27図）

歩道橋北橋脚部の調査。基本層位は以下のとおりである。

- 第1層 盛土
- 第2層 茶灰色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器含む。整地層、第1造構面。
- 第3層 灰褐色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器含む。整地層、第2造構面。
- 第4層 灰茶褐色シルト 土師器、瓦器、瓦を含む。整地層、第3造構面。
- 第5層 暗青灰色砂
- 第6層 青灰色砂質シルト 土師器、瓦器、瓦を含む。
- 第7層 青灰色シルト 無遺物、第4造構面。
- 第8層 青黄灰色シルト]



第25図 24-2 地区実測図

第9層	暗灰色粗粒砂	無遺物。
第10層	黃灰色細粒砂	
第11層	暗茶青灰色粘土	

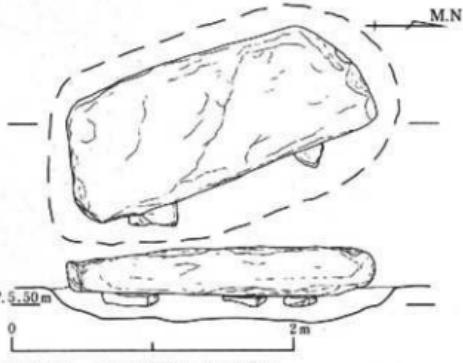
造構は第1造構面で礎石とその掘方、第2造構面で土塙3基、第3造構面で土塙2基、ピット1個、第4造構面で溝1条とピット2個を検出した。

第1造構は調査地の東南隅において、礎石を検出しその掘方を確認した。礎石は安山岩系のいわゆる生駒石で、長幅210cm、短幅75cm、厚さ35cmを測り、上面をやや平らに加工している。礎石は不整形な橢円形の掘方に3個以上の根石を置いて据えられている。掘方内は暗茶褐色砂質シルトで、土器などの遺物は含まれていなかった。礎石および掘方を検出した整地層（第2層）が16世紀後半と考えられることから、礎石はこの時期のものと思われる。

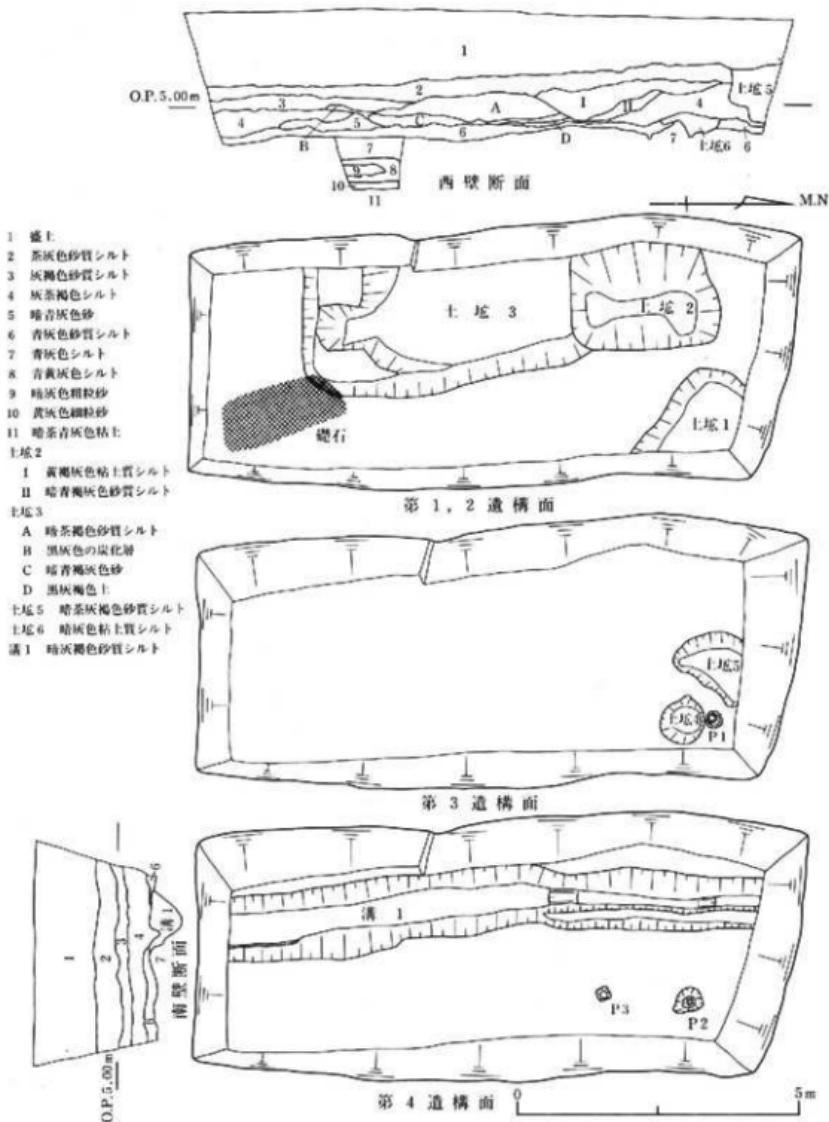
第2造構では土塙3基（土塙1～3）を検出した。土塙1は北東隅で検出したためその形状は不明である。長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.4mを測り、中からは土師器、瓦器、瓦の小片が出土した。土塙2、3は西断面にかかり、ともに形状は不明。土塙3は土塙2によって北側は削られている。土塙2は長辺2.6m、短辺1.7m、深さ0.6mを測り、断面不整の半円形を呈する。土塙内は黄褐色粘土質シルト（I）と暗青褐灰色砂質シルト（II）に分かれ、土師器、瓦器、瓦、陶器、磁器などの多量の遺物が含まれていた。I層にはとくに多く、焼土と炭が混っていた。土塙3は残長辺5.1m、短辺2.2m、深さ0.5mを測り、断面は本来不整の逆台形状を呈していたと考えられる。土塙内は暗茶褐色砂質シルト（A）、黒灰色炭化層（B）、暗青褐灰色砂（C）、黒灰褐色土（D）に分かれれる。B層は植物の焼けた炭層であり、A、C、D層にも多くの炭が混っている。とくにA層には焼土とともに多量の土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、陶器、磁器、木製品などが出土した。各土塙は16世紀後半ごろのものと思われる。

第3造構はトレンチ北側のみで、土塙2基（土塙4、5）とピット1個（P1）を検出した。土塙4は径0.8m、深さ0.2mを測り、ほぼ円形を呈する。土塙内からは土師器、瓦器、瓦などの小片が出土した。土塙5は北断面にかかり、形状は不明である。幅1.2m、深さ0.15mを測る。土塙内からは土師器、瓦、須恵器の小片が若干出土した。P1は径0.3m、深さ0.15mの円形を呈し、2段に掘り込んでいる。遺物はほとんど出土しなかった。これらの造構は出土遺物検出面層（整地）などから16世紀代のものと考えられる。

第4造構では溝とピット2個（P2、3）を第7層上面で検出した。溝は幅1.3m、深さ0.5～0.9mを測り、ほぼ南北



26図 24-3 地区第1造構礎石実測図



第27図 24-3 地区実測図

北に走っている。溝北側底部は幅3mにわたり約0.4m深くなっている。溝内は暗灰褐色砂質シルトで、土師器、瓦器、瓦、須恵器などの遺物が多量に出土している。P2は不整のたまご形を呈し、長幅0.5m、深さ0.25m測る。P3は方形を呈し、一边0.25m、深さ0.1mを測る。P2、P3とともに遺物は出土しなかった。溝1は出土遺物などから13世紀代のものと思われ、ピットも同時期のものと考えられる。

#### まとめ

以上、第20、24次調査の遺構について概要を記した。その結果、13世紀～17世紀にわたる遺構を確認したが、ほとんどは15、16世紀のものであり、当該地に存在した若江城に伴う遺構である。とくに20-1、20-2、24-2の各地区で検出した堀は一連のもので、若江城の中心部（本丸）を画する南側の堀である。この堀は第10、25、27次の調査でも確認しており、東西160m以上あったことが判っている。この堀の幅は一定ではなく、20-1、24-2地区で検出した北壁に対応する南壁（肩）は第38次調査で検出され、幅が30mを越えることが確認された<sup>3</sup>。堀は両壁とも2～3段に掘り込まれており、深さは3.2m以上に及んでいる。また20-2地区では堀内に9本以上の杭が打ち込まれており、防御用の逆茂木であると考えられる。

建物関係では24-3地区で原位置を保った巨大な礎石を検出したほか、柱穴と思われるピットをいくつか確認した。堀内などから多量の瓦が出土し、24-2地区で壁下地、壁土、礎石を検出した。壁下地は第27次調査でも検出している<sup>4</sup>。また、15～16世紀にかけて整地をくりかえしており、16世紀後半の段階（若江城廃絶直後）にも大きな建物群が、堀北側の地域にあったことがうかがえる<sup>5</sup>。

第20、24次調査では上述した遺構とともに多量の遺物が出土している。遺物については十分に整理が行われていないため、今回の概要報告ではその詳細について全く記述していない。今後、主要な遺物は機会を見て隨時報告していきたいと考えている。

1. 本概要報告は調査者不在のため、調査直後の事業報告、現地説明会資料、遺構実測図、写真、既出の関連文献および関係者の協力を得て執筆したものである。
2. 木下密蓮「若江城出土大般若經転読の木札」『調査会ニュース』No20 東大阪市遺跡保護調査会 1982年。
3. 阿部嗣治「大阪・若江遺跡」『木簡研究』木簡学会 1982年。
3. 「若江遺跡第38-2次発掘調査現地説明会資料」（財）東大阪市文化財協会 1989. 2. 4.
4. 才原金弘「若江遺跡第27次発掘調査報告」（財）東大阪市文化財協会 1988年。
5. 『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2 No.3 特集 若江城 1987年。

図 版



1. D 地區足跡



2. C 地區足跡

圖版  
2

第29次調査遺構



1. B 地区第1遺構面 (珪吽)



2. D 地区第1遺構面 (珪吽)



1. E 地區第 1 遺構面 (西畔)



2. B 地區第 2 遺構面



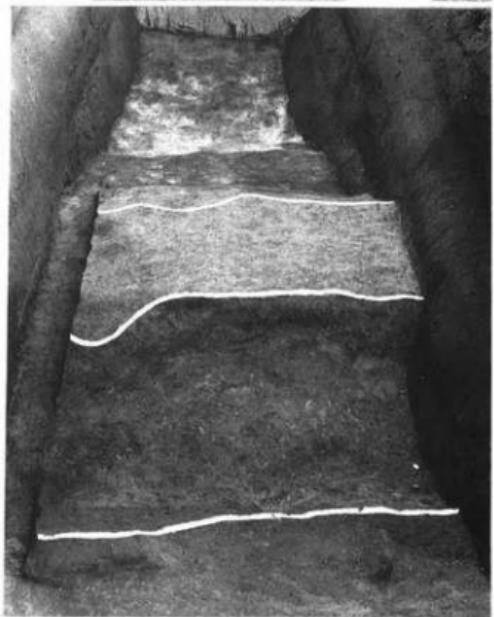
1. C地区第3、3'遺構面(溝11)



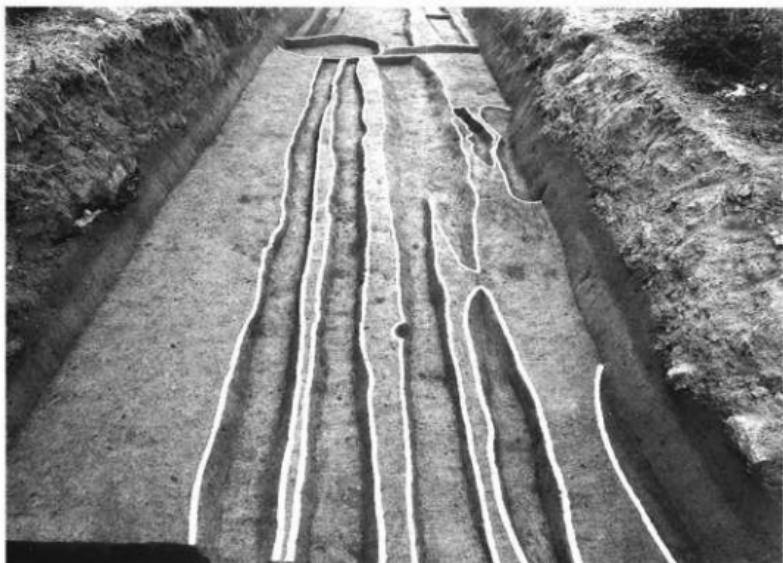
2. D地区第3、3'遺構面東半部



1. D地区第3、3'遺構面（土塙2）



2. D地区第3、3'遺構面（溝12、13）



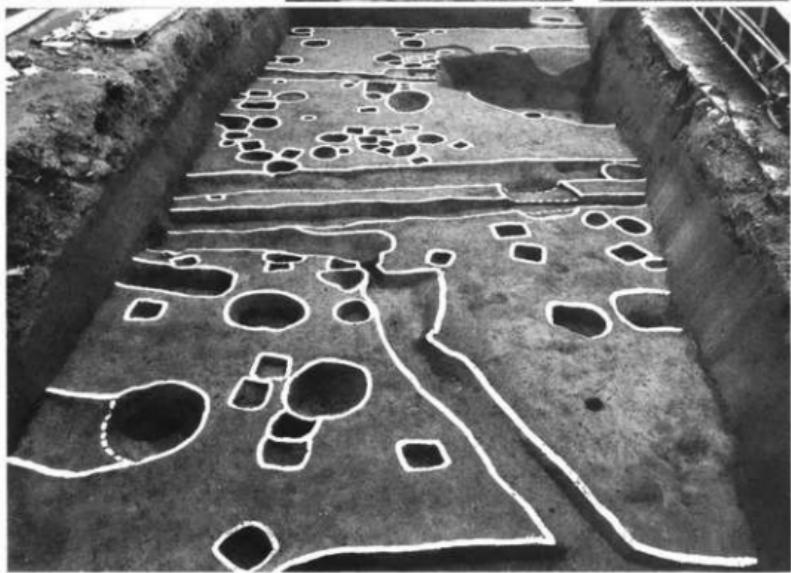
1. D地区近世遺構面



2. D地区第2遺構面



1. E地区第2遺構面



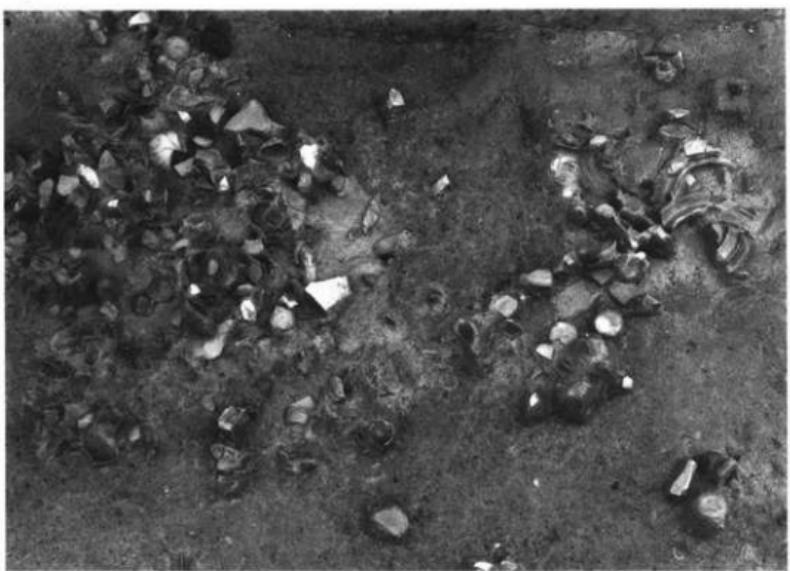
2. E地区第3遺構面



1. E地区第3遺構面（井戸1）



2. E地区第3遺構面（井戸1）



1. E 地区土器溜り



2. E 地区土器溜り



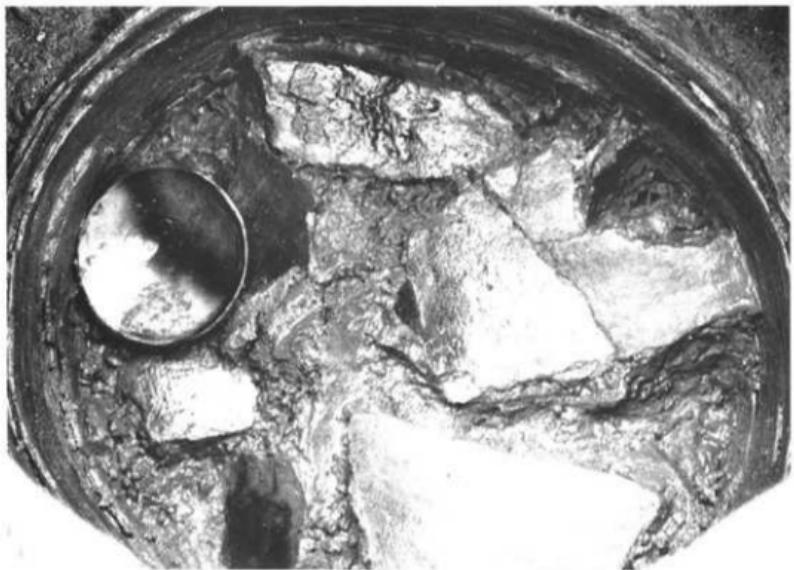
1. E地区第3'造構面（井戸2）



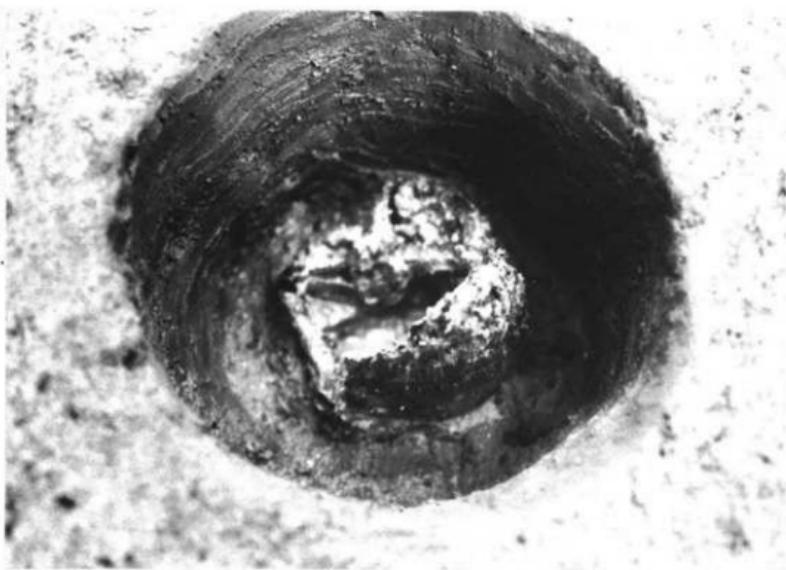
2. E地区第3'造構面（井戸2）



1. E地区第3' 造構面（井戸2）



2. E地区第3' 造構面（井戸2）



1. D地区柱穴93



2. D地区柱穴88



1. D地区柱穴89



2. E地区柱穴74



12'

1'



12

1

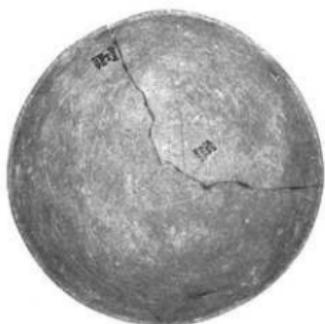


17'

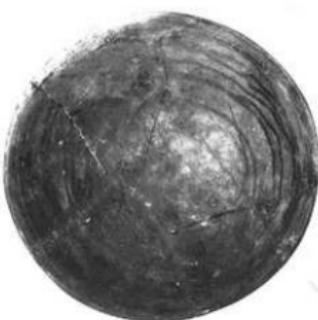
1"



17



19'



21'



19



21



20'



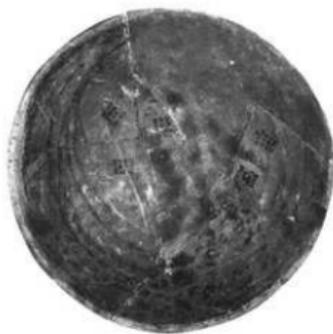
22'



20



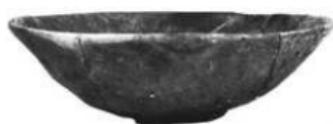
22



24'



39'



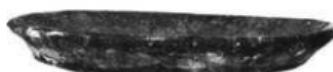
24



39



41



58



45



61



46



64



49



68



69\*



72\*



69



72



70\*



74\*



70



74



75'



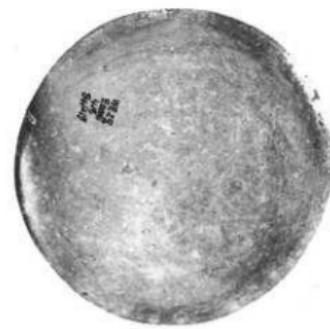
77'



75



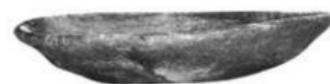
77



76'



78'



76



78



79\*



82\*



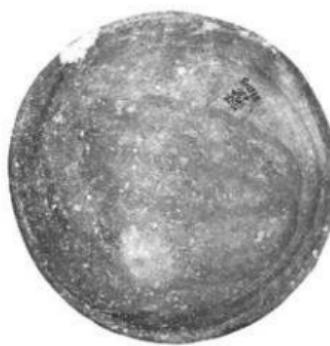
79



82



80\*



85\*



80



85



90'



92'



90



92



91'



93'



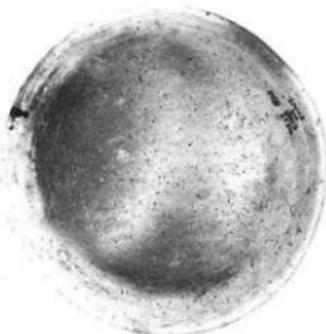
91



93



94'



96



94



96



95'



96'



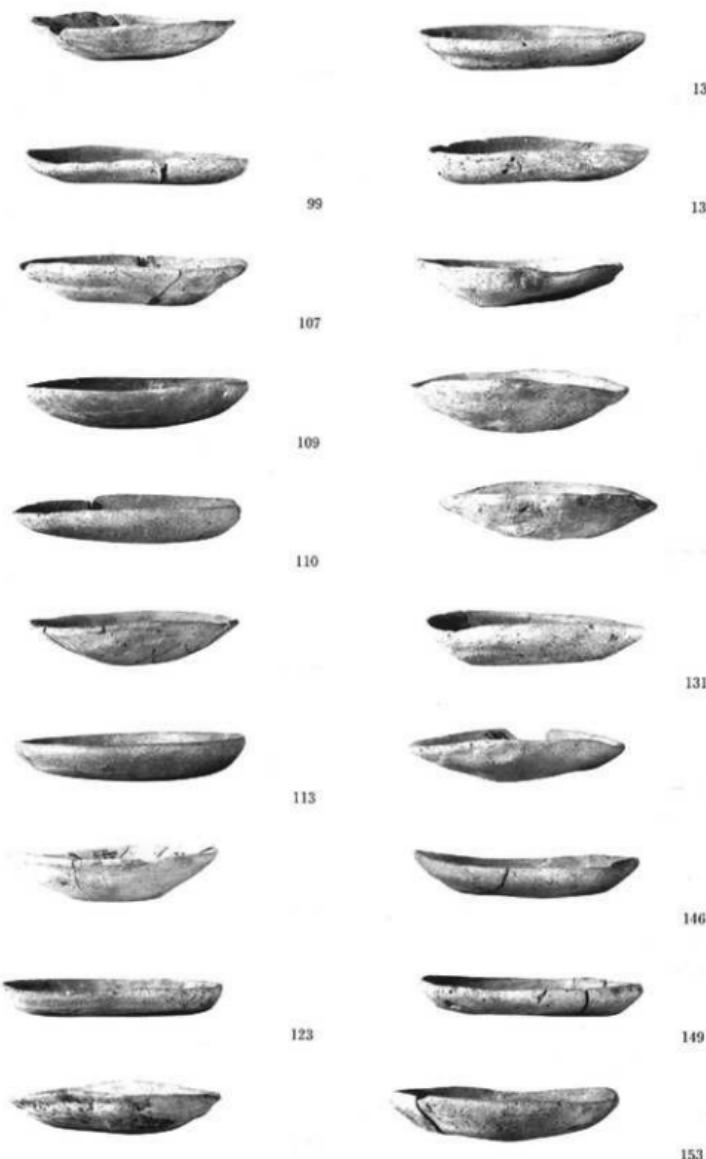
84



95



85





156

158

166

167

169

170

172

178

181



213



221



215



223'



214



223



220



219



226'



216



217



226



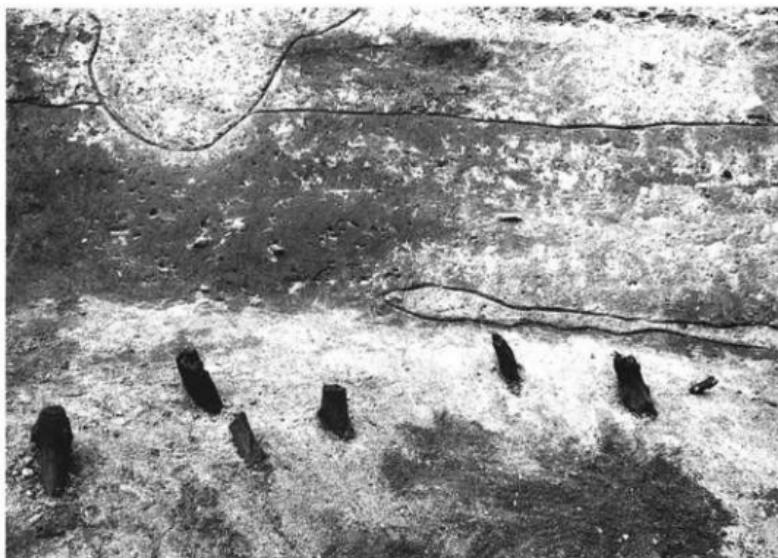
1. 20-2地区堀（西より）



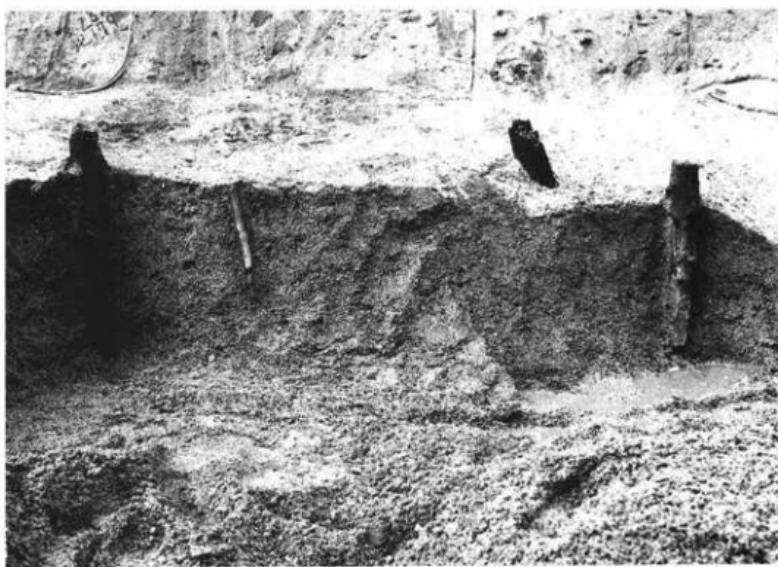
2. 20-2地区堀（東より）

圖版  
26

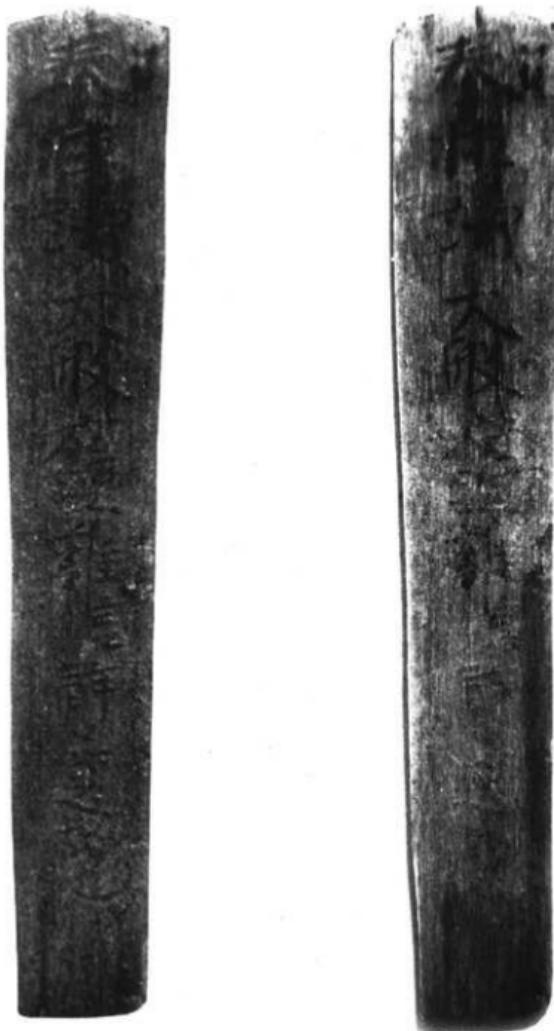
第20次調查遺構



1. 20—2 地區塹內逆茂木出土狀況



2. 20—2 地區塹內逆茂木斷面



「奉傳譲大般若經難信解品之物也」

木簡（右、赤外フィルム使用）

図版  
28

第24次調査遺構



1. 24-3地区第1、2遺構（南より）



2. 24-3地区土塙3



1. 24-2地区 堀（南より）



2. 24-2地区 堀（部分）



1. 24-2 地區堀内遺物出土状況（1）



2. 24-2 地区堀内遺物出土状況（2）



1. 24-2 地区壇内遺物出土状況（3）



2. 24-1 地区第1遺構（北より）

図版  
32

第24次調査遺構



1. 24-1地区第2造構（北より）



2. 24-1地区第3造構（東より）

若江遺跡第29次発掘調査報告

1989年3月31日

発行 財團法人 東大阪市文化財協会

印刷 ドウミ印刷広研社